

2011年度社友会総会・懇親会開催のお知らせ

- 開催日 ; 2011年7月14日【木曜日】 12:00~14:00 (開場11:30)
- 会場 ; 「如水会館」(昨年と同じ場所です)
千代田区一ツ橋2-1-1 TEL. 03-3261-1101
2階 スターホール 尚、クロークは1階になります。
- アクセス ; 地下鉄:東西線竹橋駅 1b出口より 徒歩4分
都営三田線・都営新宿線・地下鉄半蔵門線 神保町駅下車
A9番出口は白山通りの反対側に出ますが、エレベーターが有ります。
- 会費 ; **2,000円**、
(2010年度会費未納の方は合わせて5,000円お支払い下さい)
- 出欠の確認 ; 会場の手配の都合上、遅くとも**6月30日までに**同封の返信用ハガキに
必要事項記載の上、投函願います
尚、後日出欠予定変更の場合は速やかにその旨ご連絡下さい。
- その他 ; 当日は、気楽な軽装での参加をお願い致します。

ニチメン東京社友会
(事務局)



2011年新年賀詞交歓会における会長挨拶

会 長 河 西 良 治



皆様明けましておめでとう御座います、本日は非常に寒い中、かくも盛大に多くのニチメンOBの方々のご参集戴きまして有難う御座いました。

就中、年初のご多忙の折にも拘わらず土橋会長、加瀬社長以下役員、幹部の皆様が私共の為に列席戴きまして心より厚く御礼申し上げます。

双日様には我が社友会は物心共に絶大なるご支援とご援助を賜りまして、この様に双日の本社ビルに於いて第4回目の新年会を開催させて戴く事は光栄の極みで御座います。

さて、日本を初めとする世界の政治経済情勢は正にジャングルの真っ只中に居る感があり、わが国の現状も“集团的弱気心理”に基づくデフレ現象が続いて居ります。

一つのテーゼに抛りますと、日本の過去20年間の平均GDP成長率である0-1%が今後例えば30年間続くとすると、アメリカ、中国だけでなく、インド、ブラジル、メキシコ、ロシア、インドネシアに迄抜かれ、世界の第8位になって仕舞う。

一方、これをもし3%に伸ばせたとしても、中国、アメリカ、インドに次ぐ第4位であります。

然しながらもしこれを達成出来たとすればその暁には一人当たりのGDPが世界一になる事が出来る、これは日本として何としても達成すべきターゲットではないでしょうか。

今わが国に強く求められている中長期ビジョン、即ち“日本の本質的な成長戦略をどう描くのか”と言う極めて深刻な問題に直面しており、官民一体となつての戦略立案が焦眉の急の事態であると理解致しております。

何れにせよ世界の現実是中国、インド等を筆頭とする新興国群が想像を絶する勢いで発展することは疑う余地もなく、我が双日を初めとする総合商社のGLOBALなEXPERIENCEをベースにしたPOTENTIALITYは無限と言っても過言では無いと存じます。

双日の株主通信2010冬号に抛りましも2011年3月の心強い決算の数字と共に上記世界情勢を踏まえての事業展開は目覚ましく、豪州のレアメタル、ナミビアでの風力発電等新聞テレビを賑わせて居る通りであります。

BIG JUMPINGを得意とするこの“兎年”の門出に当り双日の果てしなき発展を心よりお祈り申し上げますと共に、ご列席賜りました土橋会長、加瀬社長以下の役員、社員の皆様の益々のご健闘を祈念申し上げます次第であります。

ニチメン東京社友会も発足して4年半を経過致しました、世話人一同懸命の努力を致して居りますが、会員の皆様の忌憚の無いご意見を頂戴しながら更に一層の尽力を致す所存で御座いますので、今後とも宜しくご支援の程お願い申し上げますと共に会員の皆様様の益々のご健勝をお祈り致しましてご挨拶とさせていただきます、有難う御座いました。

2011年新年賀詞交歓会における来賓ご挨拶

双日(株)会長 土 橋 昭 夫

皆様、新年明けましておめでとございます。平素は双日グループに対し、大変なお力添えを頂き厚く御礼を申し上げます。

先週1月6日に大阪でニチメン大阪社友会の新年互礼会が開催され、160名を超える盛況ぶりで、私も元気を頂いてまいりました。今朝はこの冬一番の冷え込みということで出足を心配しておりましたが、この寒さにも拘らず、このように大勢の皆様方がお集まりになり、新年会が行われますことお喜び申し上げます。

昨年末から年始にかけて聞き飽きた方も大勢いらっしゃるかと思いますが、この時期ですので、干支に因みまして今年の情勢などをお話したいと思えます。

今年は「辛卯(かのとう)」という年回りでございます。辛という年は西暦で末尾に一の付く年ですが、この年は前触れもなく唐突な事件が起こる特徴があるようでございます。振り返ってみますと、2001年が米国の9.11同時多発テロ、1991年がソビエト連邦の崩壊、1981年がサダト大統領の暗殺、1971年がニクソンショック、1961年が韓国の軍事クーデター、そして極めつけが1941年の真珠湾攻撃。このように突発的な事件が起きている年であります。2011年もそういったものに注意を払う必要があると思っております。そして「卯」ですが、兜町では「卯ははねる」といわれまして、株価の上昇が大変期待できる年のようでございます。是非今年はそうあって欲しいと強く願うものであります。

先ほどは、河西会長からの的確な経済分析がございましたので、私の方からの重複は避けませんが、今年の日本経済は政治が停滞する中、山積した課題を少しずつ消化しながら緩やかな回復軌道を辿ると思われれます。

日本・欧州・米国といった先進国の経済は、各国が共調しての景気刺激策等の効有り、リーマンショックから立ち直りつつありますが、踊り場から脱却できていない状況にあります。一方、中国・インド・ブラジル等の新興国の台頭は目覚ましいものがあり、世界経済は完全に2極化しておりますが、今年もこの新興国が世界経済をリードして行くという構図は変わりないと思えます。就中アジアの成長は著しく、中国・インド・ベトナム・インドネシアといった国々の成長は目を見張るものがございます。日本もこのアジアの一員でございますので、その優位性を生かして、これらの国々の成長に深く関わり、それを取り込み、享受していくことが、大事なことと思えます。

昨年、尖閣諸島で中国漁船との衝突事故がございまして、急遽、中国からのレアアースが脚光を浴びました。中国のレアアース扱いは双日が最大手ということで「双日のレアアース」として連日、テレビ・新聞等で報道されました。商売としては、それほど大きなものではありませんが、やはりNHKや日経の一面というのは効果がありまして、放送される度に社員のモチベーションも上がりますし、先輩諸氏からも、「ニュースを見た」、「新聞で読んだ」、「頑張ってくれ」という励ましの言葉を寄せられ、大変嬉しく思いました。第二のレアアースとして、「養殖マグロの双日」、「工業塩の双日」、「石炭の双日」、ブラジルにおける「エタノールの双日」、或いは、国で申しますと「ベトナムの双日」、また多少時間はかかるでしょうが、現在注力している「アフリカの双日」とか、このような「何々の双日」と呼ばれる事業、国を一つでも多くしていくよう努めております。



今期の業容であります。概ね順調に進捗致しております。現在私どもは、中期経営計画SHINE2011に取り組んでおり、今年はその最終年度にあたります。最終年度の数値目標である経常利益560億円、当期純利益250億円を達成すべく、年も改まり覚悟を新たにしております。この目標数値の必達に向けまして、役職員一同、精励努力してまいり所存ですので、皆様方におかれましては、引き続きご支援、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。

最後になりますが、ニチメン東京社友会の益々のご発展と、本日お集まりの皆様方にとりまして今年一年が、実り多く幸多い年になりますよう心より祈念申し上げまして、新年の御挨拶とさせていただきます。

Nmm

2011年 ご長寿お祝い表彰会員挨拶

表彰会員代表 上 條 達 雄

(場内、大きな拍手)

只今ご紹介にあづかりました上條でございます。

昭和24年に当時の日綿に入りまして、ざっと今60余年経っております。

私は専門学校も大学もみな工科系だったので、全く予想もしない貿易会社に入って、とても長生きは出来ないと思ったのですが、(場内、笑い)、最初の目標は二人の子供が大学を出る50歳までは何とか生きたいと(笑)、その見通しが立ったら今度は定年までは生きたいと(笑)、そういうことでしたのに、数えですけど88歳になったので自分でもビックリしています。これも今まで長生き出来たのは、大半がここにおられる皆様のお陰であると信じております。どうも有難うございました。

(拍手)



私は大学を出て一年半は教授のアルバイトの手伝いをしていて、そこである屈辱的なことがあったので、あわてて大学に行って就職を探したら求人の子が沢山貼ってありましたけれど、墨筆で一番上手な字で書いてあったのが日綿実業株式会社だったので(笑い)、ここに行こうと翌日行って松本部長に会いまして、上條君は大学でどんなことを習いましたか？ これこれです、じゃあ明日から来て下さい(笑)、ということで、江崎陽三さんがおりました金属部、大学が金属工学部ということだったので、金属部に入りました。2年間、持田稔さんと一緒に頑張って、2年経ったら部長から、機械部が忙しくなったから機械部に行きなさい、という口頭の辞令で、字の辞令はないんです。

その日から隣の機械部に行って、当時機械部は繊維機械などの輸出があって、非常に忙しかったんですが、私はその端っこの方で手伝いながら早く慣れるように頑張りましたが、それがいつの間にか機械での経験を積みまして、今日は見えてないかしら、丸山修作さんが一年遅れで入って来られ、僕が技術系で余り知らないということで、僕のことを非常に気にかけて色々教えてくれて、本人は直ぐにジャカルタ駐在員になって帰ってきて、今度は上條さん貴方を推薦するから、なんて、まあ半分冗談だと思っていたら、その通りになりまして、昭和31年にジャカルタの駐在員になりまして、当時は日本の商社は6か月きりビザが貰えなかったのです、私は名古屋支店が輸出した機械の技術指導という名目で一年のビザを貰いまして、赤道直下のインドネシアで、身体が持つかどうか心配でしたが日本の夏より楽だということがわかりまして、それから帰って機械部におりまして、安藤幸雄さん土井公さんの後を継いで、日本ダイアクレバイト、習志野にある工場、エンジンベアリングを作ってる合弁会社ですが、そこに出向して2年いて、2年経ったので本社へ帰れると思ったら、アメリカのクレバイト社の決算の時に本社の方に何かクレームをつけて来たらしく、そ

れで本社から上條君済まぬが後一期2年勤めてくれ、ということで4-5-6-7-8と8月まで勤めたら、工場の社長から呼び出しがあって、社長室に入って何でしょうかと聞いたら、上條さん、あなた今度はロシアに行くことになった、エーッ？て（笑）言って、じゃ本社に行って断って来ます、と言って、東京へ飛んで帰って、そしたら人事部長が真先に私を認めて、上條さん、あれは常務会で決まったので私は関係していません、と逃げられまして、5階へ行ったら満島常務にお会いして言おうと思ったら、先に、アッ上條君いところに来た、君はネ、今度モスクーに行くことになった、だって。でも常務、私はロシア語出来ませんし、ロシアと商売したこともないんですから、と断ったのですが、どうしても行けと言う。

聞いたら、何か3名の方に声かけたが皆さん口が上手というか巧く断って、やむなく僕に決まって、それでついに普通の人の倍の3年もロシアにいてることになって、ジャカルタで温めたやつが一遍に身体が冷えて、焼きが入ったようで（笑）、お陰様で非常に元気で88歳を迎えることが出来ました。

会社に対して感謝の気持ちで一杯でございます。

そういうことで、ニチメンに入るのも非常にドラマチックでしたけれども、私の想像してない人生を送ることが出来て、まァ会社に対して非常に感謝しております。

私は40歳台では何時も下條先生と医務室にお世話になってばかりで、定年まで何とか行きたいというような時代もありましたけれども、この通り88歳を迎えても元気そのもので、全てこれはニチメンに入ったことによって長生き出来た、と非常に感謝しております。

ま、私でさえ88まで生きていられるのですから、皆さんは頑張ればそれ以上（笑）、当然生きておられると思います。

これからも健康に留意されて長生きしていただければ有難いと思います。

どうも有難うございました。

（大きな拍手）



2011年・新年賀詞交歓会風景



2011年・新年賀詞交歓会報告

世話人 浜 口 信 恭

昨年からの引き続き経済の停滞感なかんづく雇用情勢の改善が見られない中、新しい平成23年を迎えました。本年は卯年ということもあり、ピョンピョンはねるウサギのように、今年こそ何か良いことが、あちらこちらで起こるのではないかと多くの方が期待する雰囲気の中で、1月14日（金）4度目の新年賀詞交歓会が開かれました。（2ヵ月後に未曾有の大災害が起ころうなどとは、ついぞ想像だにせず）

当日は大変寒い日で、最初受付の出足も良くなかったのですが、今回は参加者が随分少ないのではないかと、世話人一同やきもきしていましたが、最終的には141名の参加があり、昨年並みの状況を維持することができました。

交歓会は12時に塚本世話人の発声で幕をあげ、昨年同様小堀裕子さんの司会により、進行しました。華やかな雰囲気の中、まずは河西会長が賀詞の挨拶をされ、続いて双日の土橋会長が挨拶とともに出席役員の紹介をされました。定番となった長寿者の表彰では7名が該当され、出席者に島崎副会長が記念品を進呈。代表の上条さんからお礼の挨拶がありました。

その後島崎副会長の乾杯の音頭で一気に懇親の輪が広がりました。出席者の誰もが、懐かしいニチメン時代を振り返って、大いに盛り上がり、あちこちで談笑の音が弾みました。

13時55分、倉又世話人代表が中締め挨拶をされ、間もなく閉会となりましたが、名残惜しい雰囲気は暫く覚めやらず心残りの解散となりました。今回は年会費納入者に対する配慮としてあらかじめ領収書を用意したこともあり、受付業務もスムーズに運び、担当世話人一同手馴れたところを披露できたことをご報告致します。

4度目の今回も混乱や問題も無く無事終了することができました。関係者の皆様には紙面をお借りしてお礼申し上げますとともに、毎年ご協力いただくボランティアの女性陣には深謝申し上げます。



訃 報

ニチメン東京社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
竹 中 保	不 明	2010年12月 7日	87歳
松 村 昭太郎	業 務	2011年 2月 4日	81歳
町 井 元	化 工	2011年 2月18日	74歳

ニチメン大阪社友会

氏 名	出身部門	ご逝去年月日	享 年
塚 本 宗 弘 (※)	人 総	2010年 9月21日	74歳
梶 田 恭 三 (※)	人 総	2010年11月24日	79歳
山 谷 博	経 理	2010年 2月 4日	87歳
田 村 豊 治 (※)	織 維	2010年 2月 5日	86歳
谷 本 晃 英	綿 花	2011年 4月10日	78歳
酒 井 博 司	織 維	2011年 5月27日	73歳

(※) は非会員

ご冥福を、お祈りいたします。合掌



2010年度(2010年7月～2011年6月)年会費(3千円)入金状況とお願い

2011年4月末日現在

会員数	入金済会員	長寿会員	終身会員	未納会員
618名	548名	24名	1名	45名

尚、新年度(2011年7月～2012年6月)年会費納入済の方→

67名

 (註3)

お願い：

2010年度会費を未納付の方は当年度末(6月末)までの納付にご協力下さい。2011年度分についても早めに納付頂きますようよろしくお願いいたします。振込先は、下記いずれかを利用して下さい。(振込手数料は各自ご負担願います。)

1) 郵貯銀行へのお振込み：

口座番号：00100－4－318041

口座名義：ニチメン東京社友会

2) 三菱東京UFJ銀行東京営業部へのお振込み：

普通口座

口座番号：8225155

口座名義：ニチメン東京社友会代表倉又則夫

(註1) 長寿会員は年会費免除になっておりますが、長寿会員からご送金を頂いた場合は当会へのご寄付とみなし処理させていただきます。(会運営上大変助かります)

但し、何らかの手違いによるご送金であった場合は事務所までご連絡下さい。

(註2) 長寿者氏名：(50音順敬称略)

石川勝美、井本公一、大村讓、柿本寅之助、河西郁夫、加藤信一郎、門松孝、上條達雄、川崎清、北村俊夫、国領和彦、近藤貞一、佐藤信世、新藤喜代次、鈴木明、鈴木邦治、土橋久男、内藤謙二、藤田一郎、望月昌徳、山木重貞、山口富治、山口富美子、山口良孝(以上24名)

(註3) 2011年度(2011.7～2012.6)年会費納入済み会員：(50音順敬称略)

青木繁行、青木浩、浅利真司、新井康友、荒木武雄、池田照幸、石井幹雄、石原清、今井宏臣、岩田英昭、岩下恒則、上杉将司、浮貝泰匡、内田英三、海野敏夫、大野久生、大森啓作、小方高明、小野宗一、小野寛、河西良治、唐崎和彦、川端勝四郎、岸川榮一、北川嘉雄、木村次郎、窪田厚三、黒住厚、小林瑛之、佐藤鉄雄、澤井修次郎、椎木与志也、三分一克美、島村健雄、下浦通洋、白坂泰之、杉浦好治、土田成穂、土井安之、土橋勇、豊間根政行、中川十郎、並木正、南部晴雄、西川周、西川洋、西田昇、西野幸夫、羽島昭一、林正弘、日原東洋、平井出良彦、平岩勇、平岡昭三、廣瀬一彦、藤井正之助、藤野泰三、細谷聡、堀江亘、本間登志雄、前田進、前田孝、牧洋生、丸山修作、三嶋敏夫、三島光博、横山正巳(以上67名～4/30現在)

俳句の会「いろは句会」

宇 治 田 薫

I. 句会のその後：

3月11日（金）14時46分、東日本大震災が発生。巨大地震に次ぐ大津波に襲われた多数の犠牲者に謹んで黙禱し、被災者に御見舞を申し上げるばかりです。

未曾有の天災による危機的な原発事故・電力不足・交通制限、加えて続く余震や地震酔い等々の諸事情もあって、我々いろは句会も3月例会を自粛して中止する始末となった。

秋9月の季語に「震災忌」があるが、今回の巨大震災はそれ以上の規模と言われる為、春3月の新季語として「津波忌」が生まれても何ら不思議ではない思いである。被災に対するグローバルな支援が行われる一方、再起への意気込みも生まれつつあり、我々も思い切って寄稿に踏み切る事とした。

例により、前号以降の作品の中から各会員2句宛下記にご披露する事と致します。

I. 会員の発表句（アイウエオ順）：

晩春の懈怠き老いの家籠り	（あ き ら）
節電の昏き灯わびし春の宵	〃
万物の翳より兆す小さき秋	（宇治田 薫）
名月や壁白々と蔵の町	〃
懇ろになりし病や初みくじ	（太田 琢也）
母凜と昭和を生きし寒椿	〃
筆を持つ指先かたき余寒かな	（久保田悦子）
雪山の暮れて稜線鋼色	〃
分かち合ふ妻と勤労感謝の日	（三枝 一希）
慈雨を得て肌に優しき余寒かな	〃
朝靄の屋根に猿来て紅葉宿	（笹原 弘）
富士のぞむ一湾風ぎて冬温し	〃
名月や水まんまんと印旛沼	（佐藤 秀隆）
新米の輝く味の塩むすび	〃
鳴く声の日ごとに浅し虫の秋	（下川 泰子）
立話はずむ日向や冬ぬくし	〃
無常なる被災の中の彼岸かな	（須藤 忠昭）
油売り声一段の余寒かな	〃
落葉踏む一枚ごとの音を聴く	（塚本 幸雄）
春浅し浮雲なほも定まらず	〃
立冬や蛇行の川の波とがる	（福島 有恒）
滔滔の流れに沿ひて黄水仙	〃
分け入れば小さき花あり草紅葉	（藤野 徳子）
冬ぬくし母は白寿にあと二年	〃
柿一つ残したる村空青し	（若月 義和）
外房の菜の花越しの海の色	〃

以 上

第13回ニチメン欧州会開催報告

柴 田 隆

第13回欧州会を4月11日に奈良の江戸三で開催しました。出席は18名でした。

当日は心配した桜も未だ満開に近く、会場の江戸三の別棟吾妻屋の付近の桜を楽しみながらの宴となりました。

残念ながら太田昭会長はご欠席でしたが、田淵弘通さんの開会挨拶に続き、関東よりご参加の池田格さんの乾杯の音頭で始まり、なごやかなひと時を過ごしました。

閉会後は、ウオーキングの主のような松尾哲雄さんを先頭に奈良散策を希望者で行いました。浮御堂、春日大社、三笠山を巡って二月堂に着いたころ、雨がぱらつきだしたので、残念ながら散策を切り上げ、急遽帰路につきました。もうこれ以上“柄の悪い”(?)我々にうろついて貰いたくないという春日の神様のご意向だったのかも知れません。

来年は4月10日に、清水浩さん、田中長典さんが幹事で開催予定です。

「花みれば世のうきこともわすられて

いのち長きもうれしかりけり」と良寛が詠っています。来年も桜の頃に集まり、“いのち長き”を喜びたいものです。

(大阪社友会会員)



前 列：武内昭信、大嶋信吾、梅田幾生、島悠紀夫、和泉雅一、岡島岩男

2 列目：田中長典、津田忠佑、北川元衛、段裕貴、池田格、内田満、田淵弘通、宅哲男

3 列目：藤田康弘、松尾哲雄、柴田隆、金谷安勝

ニチメン・デュッセルドルフ会

柳 澤 清 充

平成22年11月19日(金)第4回デュッセルドルフ会が京都で開催されました。この日は秋晴れの穏やかな日で、紅葉も見頃とあってOB会日和でした。会場はThe Oriental Garden Kyotoで竹内栖鳳画伯の旧宅跡で、近くには八坂の塔、高台寺、清水寺などがあり、観光にも至便の場所としても大変人気のあるレストランです。

デュッセル会は東西合同で行われる数少ないOB会で、東京と大阪が交互に幹事を受け持ち、毎年秋に開催されることになっています。現在の登録メンバーは60余名の大所帯ですが、今回は、まだ現役で勤めの都合から週日参加の叶わぬ方も多く、加えて、体調不良で止む無く突然の不参加になった方もあり、例年に比して参加者の少なかったのは聊か残念でした。

田中義巳元社長の乾杯の音頭で賑やかに宴会が始まり、イタリー料理でワインを楽しみました。メンバーは1960年代から、つい最近まで30余年間ほどに跨ります。この間、苦しい時代に駐在した人、又逆に、黄金時代に当たった人もある訳ですが、時を経て、全ての思い出が懐かしく語り合える、これがOB会の値打ちだとつくづく思いました。予定の時間はとうに過ぎても話題は尽きず、来年も元気で再会できる事を祈って散会しました。

尚、デュッセルドルフ店は1960年にハンブルク店の支店として発足し、今年は開設50周年に当たるとのお話が、当時開店にご尽力された坂井啓治元支店長よりご披露されました。今でも、双日のオフィスとして健在です。日本でも金婚式などと言われますが、ドイツでも50周年は大切な記念の年として、盛大なお祝いがあるようです。

<Gratulieren ”50e Jubilaum der Deutsche Nichimen Duesseldorf Prosit ! Prost ! 乾杯！>

平成23年度第5回のデュッセルドルフ会は11月初旬の休日に東京で開催を予定しています。遠方ではありますが、関西からも多数の皆さんの参加をお願いしておきます。
(大阪社友会会員)



敬称略：前列左から池田格、近藤晴亮、田中義巳、坂井啓治、内田満、津田忠佑

後列左から大西憲二、白井厚三、島悠紀夫、柳澤清充、米田圭祐、深海賢重、斉藤至弘、大場俊雄

日綿・大阪産業機械課(=OS・MCS)OB会

長谷川 洋

今年4月25日、箱根小涌谷に、なんと半世紀前の縁で8人のOBが集った。
京都から辻井準一さん、神戸から澤田太郎さんのお二人の大先輩をお迎えして。

1960年代、日綿実業大阪本社・中之島ビル一階の一隅にOS・MCSがあった。当時の満嶋常務(後の副社長)が、御元気に機械部の総帥として部屋中に響く大きな声で陣頭指揮をされていたのが懐かしい。

1968年には、MCSヤンマー部隊が大挙して東京支社に異動したもののルーツは飽くまでOS・MCSだった。

箱根に集まった8人は、昭和25年から36年入社までで、今や全員古稀を越えたどころか殆んどが後期高齢者だ。世界を股に駆けた往時の企業戦士8人の足跡を辿ると地球を何周することか。

駐在地は、近くのソウルから始まり、バンコク、サイゴン、ジャカルタ、ヤンゴン、カルカッタ、ニューデリー、ボンベイ、コロombo、フィジー、ダッカ、イスラマバード、クエート、パリ、ロンドン、モスクワ、ヘルシンキ、モントリオール、ニューヨーク、シカゴetc. だ。

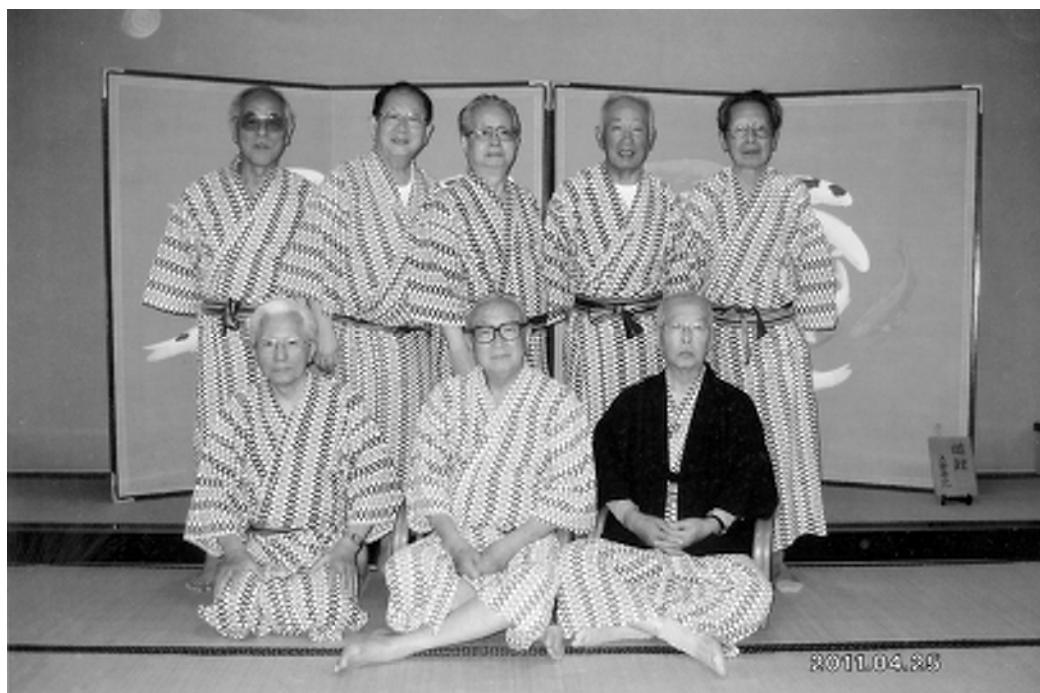
中之島のOS・MCSを濫觴として、皆夫々に海外に雄飛し、10年~20年を彼の地で過した。花のロンドン、パリ、NYもある一方、瘴癘の地でも、よく生き延びて来たものだ。

2011年新緑の箱根に集い、美酒を酌み交わし、懐旧談に夜の更けるのも忘れた。

いつもは7PMには床に就かれる澤田さんもお話に興奮されて、その夜は一睡も出来なかった由。でも懐旧談は、吾ら老人の頭脳の活性化には良いことだと、脳科学者は言っている。尚、広本昌也、大平栗雄両兄は所用で欠席。

次回は、また皆元気で御会い出来ますように！

最後になりましたが、この会の世話役、川西勲名幹事に多謝。



前列左から ; 林 義人、辻井準一、澤田太郎

後列左から ; 本田 務、川西 勲、長谷川 洋、小橋雅寛、泉 伸夫。〈敬称略〉

nmosnmos ニチメン大阪社友会ニュース nmosnmos

編集部：長谷川 洋

2011年度『新年互礼会』は、1月6日、由緒ある“太閤園”にて開催された。
本年も近畿2府4県他、遠く東京、愛知、福井等からの参加者を含め出席者総数は過去最大の157名を数えた。

11：00、白川晴朗世話人代表の開会宣言でスタート。
まず田淵弘通会長の挨拶、そしてご来賓の双日㈱土橋昭夫会長の御挨拶と干支に関わる大変示唆に富んだお話を御聞きしました。

その後、米寿会員（今年は3名）を代表して、山本峻さんが御挨拶し、御元気に熱弁を振るわれて、ロシアの劇作家チェーホフの言葉を引用して、人生を余り難しく考えず、過去に拘らず、前向きに明るく生きよう と述べられました。

乾杯の儀は、澤田太郎さん、遠い昔のパリ駐在員、後にサイゴンおよびモスクワの所長。
矍鑠として乾杯の音頭をとられた。

OB京野勉さんの寄贈による『美酒爛漫』に酔いつつ、宴は進み、ボランティア出演の『箏アンサンブル♪アイリス』の初春の演奏にも酔いつつ、アンコールでは、なんと阪神タイガースの応援歌『六甲おろし』が奏でられ、大多数の阪神ファンのOBの声が会場にこだました。

暫し興奮冷めやらぬ中で、14：00木村幸史副会長の中締めとなった。



ニチメン大阪社友会
2011年度『新年互礼会』風景



『予知能力』とは。

丸 山 修 作

最近、旧ニチメン電子本部出身でニチメン・テレコム（NTT）の社長を10年間勤めた田中長典氏の著書「私のテレコム戦記」を読ませて貰った。4百頁近い長編である。彼は定年を目前にし、将来を模索していた1992年通信自由化民営化の機運が国内に高まりその中で移動体通信の将来性を見越し自ら携帯電話の国内販売会社の設立を企画してニチメン・テレコムを創設。その後、10年に亘り創業者社長として活躍しついに資産価値一千億円の会社に育て上げた。1960年後半彼はニチメン米国シカゴ支店に勤務し数年間私と職場を共にした男だが、地味で真面目の印象は強かったが決して目立つ社員ではなかった。

元来、ニチメンは消費者に直結する国内販売は不得意であった、特に機械部門にあつては1970年代機械本部も『川上から川下へ』の標語の下、卸売から小売りへの展開を本部内の研修会で度々討議された。

その意識は会社首脳部も有して居た筈である。

事実スーパーの営業も始めたし、食品部門では小売業にも手を出した。然しそれらは長続きしなかった。

小売りの現場を他の会社に委託し、その会社に物を卸す金融介入の卸会社しか頭になかったのではないかと、

田中氏はその著書に記述している。

時の田中氏の移動体通信分野への参入は「今更、大手商社が携帯電話の小売りに、何故？ とする周囲の批判に中、自らの予知能力を信じて実行した決断は高く評価されるべきで、その後10年に亘つての活躍は実に見事である。シカゴの時代の田中氏とは別人の如くだ。

先の太平洋戦争は日米海軍の戦闘であったという。開戦当初は日本海軍の保有艦船にさほどの差はなかったのに何故、海軍はあのような惨憺たる敗北を喫したのか。

それは、日本海軍首脳部の予知能力の欠如が原因と云われる。時の山本連合艦隊司令長官は米国との開戦前より近代戦は航空戦力が勝敗を決すると見ていた。

日本海軍戦以降大艦巨砲主義を伝統とする日本海軍の中では極めて少数意見であった。

そして、1941年航空母艦を主力とした機動部隊ではハワイ真珠湾を奇襲攻撃し、戦いの火蓋をきった、停泊中の米海軍艦艇の多くを撃沈あるいは破壊するという大戦果を上げた。

その翌年の6月ミッドウェイ海上にて日米海軍は激突した。航空機による戦いが日米戦の勝利を決すると早くから予知していた、山本長官はこのミッドウェイ海戦では駆逐艦などの中型艦に空母機動部隊防御を任せ、自らは空母部隊の後方3百マイルに戦艦大和に座乗して海戦の指揮にあたった。

結果防御力の手薄の日本海軍空母は米空母の襲撃に遭い無残な敗北を喫した。

近代戦は航空戦力が決めてと、冴えた予知能力を有した

山本長官ですら、大事な場面で『大艦巨砲主義』の伝統から脱し切れなかった。これ契機に日本海軍は戦局挽回の機会なく日本は雪だるまの如く、1945年8月の敗戦に転げ落ちた。

ニチメン・テレコムは創業以来確実に拡大を毎年相当額の利益を稼ぎ出し移動体通信業界では屈指の携帯電話販売会社に成長した。

その間に親会社ニチメンは経営に破綻の兆しを見せ始め、業績絶好調にあつた子会社のニチメン・テレコムを決算対策の為400億円で売却その後日商岩井との合併でニチメンとともにニチメン・テレコムの名も消えた。

山本五十六と田中長典を比較しては両者が迷惑がるかもしれぬ。然し片や国家危機存亡の時、片や会社の危機到来寸前に夫々自らの予知の能力を信じ、それに基き企画しそれを勇猛果敢に実行に移したところは似ている。然し、前者は自己の失敗で潰え去り、後者は外部環境の変化で消え去った。

予知の能力を周囲に理解させるのは難しい、変な事を云うやつだと一笑される事も多い。

予知能力の具現を実社会に貢献させるには幾多の条件が必要となる。

第一に予知能力保有者の絶ゆまざる修練、決断力

と、実行力と持続力。

第二にこの人物を支える強力な組織と周囲の環境
第三に継続的な効果の実現である。五十六と長典は事情は異なるが両者とも第一の条件には合致したと考える。矢張り人物である。

3月11日東北地方にマグネチュード9と云う巨大地震と大津波が襲来し、加えて発生した東電福島第一原発の爆発事故と放射能もれは福島県とその周辺地区に激甚の被害を与えた。地域住民に齎した深刻な恐怖と苦痛は計り知れない。これらの自然災害や原発事故は到底予知出来ず想定外で

あったとされるが、二度とこのような災害を発生させてはなるまい。事故を報道するテレビには有名大学の教授が引きも切らずに出てくる。地震津波、原発放射能の研究分野にこんなにも多くの専門家が日本に居たのが驚きである。彼等はなにをしていたのか。自然災害に対する予知研究を徹底して進めるべきであり、併せ、危機管理システムの早急の構築を実施すべきだ。

然し、誰がこれを指揮統轄するのか？

矢張り人物である。

NMTKNMTK *会報への寄稿お願い* NMTKNMTK

年二回発行の『会報』も、皆様のご協力で第10号を数えることが出来ました。
今後とも益々内容充実のため皆様の自発的寄稿をお待ちいたします。

例えば、*最近耳にした一寸いい話 *私の老後の趣味 *私の健康法
*旅行記 *ニチメン時代に会ったユニークな人たち *私が経験した危機的な出来事
*ボランティア奮闘記 *感銘を受けた本 *海外駐在の思い出
*部門別あるいは個別のOB会等々。

応募は、社友会世話人名簿記載の会報チーム；長谷川・高木・倉持までご一報下さい。

または最寄りの世話人にご連絡下さい。

原稿は、原則として、Max4,000字。手書き又はタイプしたものも可ですが、出来ればPCのWORD Sで、メールして下さい。

社友会事務局宛（住所は会報に表記）直接送付も可です。

「東日本大震災に思う」

大 山 弘 雄



新聞報道によれば今般の東日本大震災の死亡・行方不明者数は約2万6千人という。亡くなられた方々のご冥福をお祈りと共に、ご

遺族及び震災に遭われた方々への心からのお見舞いを申し上げたい。

さて、震度9を超える大地震の当日、会員の皆さんはどこで、どうされていたのだろうか。私の場合は、同好の仲間とのんびりと囲碁を楽しんでいる最中だった。尋常ならざる揺れ方に少しあわてて避難出口の確認をしたり頭上に目をやり落下物に注意してみたり・・・。

家に帰ってみると幸い目立った被害は一つもなかったが、孫のところへ遊びに行っている家内とは電話が繋がらず様子が分からない状態がしばらく続いた。千葉の製油所では火災が発生しているらしい。テレビを見ていると震災地の被害状況が刻々と伝えられている。都内でも帰宅困難者が大量に発生、これは大変なことが起こっているなと実感した。

3月19日に予定されていた双日囲碁部（兼ニチメン囲碁部OB会）の月例会は中止するよう幹事のIさん（双日勤務）に進言。聞いてみるとIさんは気仙沼の出身で、まだ家族との連絡がつかないとのこと～

その後全員のご無事が確認されたが、救出されたお祖母様は数日後に亡くなられた由。まことにお気の毒なことであった。

このIさんのことが一つのきっかけで、我々ニチメン東京社友会の会員諸兄の中にも東北在住の方が確か居たはずだと思いついた。さっそく会員名簿で調べてみると、東北地方の太平洋側に現住所がある会員は佐久間正光さんと逸見勝衛さんのお二方（いずれも福島市在住）であることが分かった。

個人的なお付き合いはなかったが昔同じ釜の飯

を食べた仲間である。何かお見舞いをと考えたが良い知恵がない。なかなか通じないと聞いている電話を架けてみるのが手っ取り早いかなと思ひ、世話人代表の倉又さんに相談を持ちかける。

倉又さんも同じような思いであつたらしく、二つ返事で電話にOK、自らコンタクトして下さることになった。結果は、お二方及びご家族は全員無事、津波の影響はなかったが断水で困ったこと、福島原発の放射能漏れが最大の懸念事項であることなどが判明、とりあえずはご無事であつたことに一安心する。

本件はさっそく世話人会の役員・世話人の皆さんにはメールで報告。同時に会員名簿に都道府県名が入っていなかったので整理することにした。その結果、会員の所在は多い順に、東京251名、神奈川188名、千葉88名、埼玉47名、静岡・大阪各6名、兵庫5名、北海道・京都各4名、栃木・福岡各3名、福島・茨城・愛知・宮崎各2名、残りは山形・秋田・石川・新潟・山口の各県が1名ずつで合計618名。

今回のような大震災にはまったくの無力である我々だが、この紙面をお借りして、各地にお住まいの会員諸兄及びご家族の皆様のご無事と益々のご健勝を心からお祈りしたいと思う。

（追記）

今から十年ほど前、私は家内とともに問題の福島原発のある大熊町に一泊旅行したことがある。

当時、娘婿が半年ほどの短期出張で家族ぐるみ同地に滞在していたのだが、満1歳を少し過ぎたばかりの初孫の顔を見たい一心であった。また、今回津波に襲われた浪江町の漁港では海鮮料理を賞味した記憶がある。そして、以前その浪江町に3年ほど住んでいたというのが、現在私が親しくしている囲碁仲間のMさん（囲碁同好会会長、七段）である。色々なところで色々なつながりがあるものだと思うとともに原発事故が一日も早く終息して福島に平穏な日々が戻ることを切に願う。

原発事故で見た日本

齋藤 勝義

福島第一にて重い放射性物質バリウム、ランタン、セリウムは海洋に、軽いヨウ素、セシウム、テルルが大気に放たれた事は 炉心崩壊が相当進み、外部に露出した事を示します。

年間予算2200億円を使い 4000人の技術職人を抱えるに原子力機構も この深刻な事態に

此れと云った有効な提言も出来ず、日本を代表する東電がうろたえて居る実態に世界は驚いて居る。非常事態だからと云い、充分な外交ルートを通じた説明も尽くさず、唐突に放射能汚染水を海洋に投棄した事は 日本と言う国の形が整って居ない事をも 残念ながら露呈。

1) 文部科学省と国民への核散気象情報

世界の海を駆けるノルウェー商船隊の安全を考え 核汚染地区の気象情報を北欧から連日流す。在外居留自国民の安全の為、ドイツ国立気象台は 福島から風に乗った核汚染の気象情報を公開。日本にはSPEEDIと言うトップレベルの同じ核汚染気象通報システムがあります。NHKTVは 何故 此れを国民に伝え 安全喚起をし無いのでしょうか？

政府と国民の間の不透明性は民主国家として大きな問題として論議が必要。

2) 原子力とは？其の国民経済・産業的メリット・デメリットは充分理解されているのでしょうか？

其れを安全に活用する前提は何か？ 其れが地震国日本に於いても 安全利用できるか？不適切であれば、国の発展のエネルギー確保をどうするか？この点にも 国民と政府の間に公正な論議が尽くされて居るか不明であります。

陽子が中性子に触れ二つに臨界する時のエネルギーの程度は核物質調合の多少で、原爆に成ったり、原発に利用されます。今回の事故はドイツの政界地図も塗り替え 今後の原発の可否を3ヶ月のモラトリウムをもって再協議する事に成りました。私はこの機会にドイツの知識人に 原発が安全に停止でき否かの知識確認

を試みました。ドイツ語で原発を止めることをアプシャルテンと言います。そこでアプシャルテンの後の原発は どうなるか質しました。高等教育を受けたドイツ人は其の時点から 爆発事故も起きないし安全が完全に確保できると思って居るのです。リアクター炉心の沢山の燃料棒の束に制御棒が入り、核分裂停止と呼びますが、其処からの核の物凄さを 理解して居ないのが多くのドイツ国民でした。

炉心の燃料棒も使用済燃料棒も確実な冷却を20年・30年と続けないと 其の持前のとてつもないエネルギー(すぎましい残留熱)をもって再臨界し爆裂します。冷却には 限りない冷却水が必要で、海に隣接して原発立地を求めます。地震・津波の怖さは 地震の振動で原子炉を取り込む圧力容器の再循環ポンプの継ぎ手に ヒビを入れたり破碎して核物質が露出する事です。専門家はこの部分を 悪魔のポンプ継ぎ手 と云うそうです。海からの津波は 海水・真水を間接冷却する熱交換器や炉心冷却ポンプをノックアウトします。此れが損傷すると、大方は緊急のディーゼルエンジンが自動的に動き発電するのですが ピストン往復運動をするレシプロエンジンは 大体地震で転倒し動きませんから、非常用電源も供給できません。地震国ではこの非常用エンジンは 小型ガスタービンの様な逆さまに成っても働くエンジンで無ければ成らないのが常識です。日本は此れも採用していません。さて 炉心の再循環ポンプが潰れ、冷却も出来ない場合はウランが剥き出しに成り、猛烈な汚染圧力蒸気を噴出しますから、此れを機械的に押さえつけ閉じ込める為 格納容器が必要です。其れは適切な容量と耐圧能力が必要です。しかし過大な事故で圧力に耐えられない時は逃がし弁を取り付け 弁を通し汚染核物質を外の大気に放ち逃がします。汚染した核を其の儘 濃い毒性の高い状態では具合が悪いので、大型の対核サンドフィルターを通します。此れが欧州での良識ある処置です。

福島事故では二つの重要な過失がありました。
—90年半ば 米国から 安全の為 一番大切な 格納容器の容量不足が指摘されました。

これに対する対応は 格納容器の容量を大きくしないで 逃がし弁の設置のみ留めるお手軽処置でした。

一次は 汚染核物質を外気に放出する逃がし弁(爆発防止)の外につける 核汚染低減 フィルターです。これも高価で場所を食うので取り付けませんでした。

日本国民を守る最も安全に大切な上記2点を怠ったのです。

国民が核エネルギーを充分理解しない間に、天下り・もたれ合いで癒着した関係の役所は責任を逃れる為、事業責任は発電業にありと規定をし、高い安全基準の法整備もしない儘事業認可をしました。これが 経済産業省安全委員会です。天下り受入れで態度が大きくなった発電業者は 経済効率優先で DBA(Design Beyond Accident)と云う 国際的 技術者の良心をないがしろにしました。耐震設計、津波への防潮堤、非常用エンジンの選定の不注意、原子炉圧力容器設計不具合 その他 最悪の汚染物質の放出のフィルター どれを取っても 天下りの為に 落第点のところ甘く眼をつぶり Quick Moneyを容認した政府と事業者の抱き合いの決算としか受け取れません。倫理無き原発事業が浮き上がりました。学者も行政の責任者も事業も今は想定外と言い逃れますが彼らは日本人の倫理観を持っているのでしょうか？ この点を 国会の場に関係者を呼び質さねば成りません。こんな状態で地震国の原発は考えられるのでしょうか？

3) 欧州事情

チェルノビー以来、原発をSUPER-GAU(巨大でスザマシイ事故を起こす化物)と呼びます。

ドイツでの発電の内の原発比率は概ね日本と同じです。フランスは 基本路線を踏襲。

其の背景は ドイツを抑える為の原子爆弾保有の安全保障があります。イタリアは地震国なのでロシア・北アフリカの天然ガス発電とし核無きエネルギーを目指す。北欧は最も未来志向で…大規模集中発電をすると産業も家庭も

エネルギー浪費に走り、自分の懐で地域発電：給湯事業をすると節約の現象を見て……国土分散型の様々なエネルギー源を使いコージェネ(電気と給湯)を進めて居る。

ストックホルム；大規模地区では：

大型ガスタービン1200度以上高熱のコージェネ

デンマークの小さな町では：塵処理から発生するガス利用のコージェネが例。

電気事業会社とガス事業会社の仲が悪いのは何処の国もそうですが、先進欧州では次第に余剰電気の買取と再分配が進み、集中発電から分散・節約型発電・給湯に移行。

一方 北アフリカに壮大なソーラー発電帯を設けて、此れを欧州に供給するプロジェクトは既知の通り。英国では国営企業の独占禁止と発電事業自由化に沿い、大手企業は大型発電機設置したり リースし、自家発電を進めて居る。

4) 日本の新たな動き

日本の場合は経団連が中心となり、大手企業は今後の電力確保の為、

短期的には 米国のCATTERPILLARソーラー社の大型ガスタービンコージェネ等を導入

長期的にロシアと関係改善を進め 天然ガスの大量入手と民間主導シベリア・パイプラインを重視。電力事業の大幅な自由化と複数の事業者を選ぶ選択方式が今後重要。

商社には 大きな大切な役目が今後 課されている。

東日本の復興には10年の時間単位で取組むと云う。並行し産業支援の早急のエネルギー確保を行い景気落込を避け、製造業海外逃避と日本空洞化を回避が大事。進むべき方向は

首都圏や工業地帯： 大型 電気・給湯プロジェクト

地方圏では復興補助金を用い 地域・分散型
—//—

今の日本政治混乱と硬直的官僚機構の改革は遠い路で、民間主導で大型エネルギー事業を行い、地方は自ら事業主体と成って、分散型発電給湯事業を進め地方復興の旗頭にならねば成らない。政治家と役人が絡んだロビー利権の動きを厳しく検め此れを禁ずる立法も。

第二の人生、大学教員として思うこと

—大学のあり方について
—若者に感動を与えられたか

園 山 春 一



1997年より北陸の金沢にある北陸大学外国学部に教授として採用され、今年で14年目の教授生活を送っています。その間、2003年より5年間学部長を任命され、

単なる授業や講義をする教員としての経験に加え、大学の業務を体験、経験することも出来ました。

今回、何か書くようにといわれ、教壇で講義しているアフリカやヨーロッパやフランス語について書くことも考えましたが、約15年の大学生生活の体験や経験を語ることが、大学で過ごした年月を振り返ることであり、またこの拙文を読まれる多くの方にとってはあまり親しみのない世界のことでもあり、皆様にとり何か新しい観点や問題を知っていただく機会ではないかと勝手に考え表題、特に、2つのサブタイトルについて書くことといたしました。もし、皆様にとりまったく関心のないことを書いてしまっていたら申し訳ないと思いますが、一方、拙文が皆様に何かをお伝えできたら私に取り何にも変えがたい喜びです。

1. 教壇に立つ夢

大学を卒業しニチメンにお世話になり、35年近く勤めさせていただき、その間様々なことを学ばせていただきました。しかし、私の小学校の卒業時の作文には、将来新聞記者になりたいと書いてあります。また、5年生の時には、先生になりたいと書いております。この二つの職業に共通することは、人に何かを伝えたいと言うことです。それは、5年生のとき担任の先生が毎朝本を読んでくれたことに起因します。読んでくれたのは、『ビルマの豎琴』（竹山道雄著）でした。この本の物語に夢中になり、感動し、毎朝先生の読んでくれる先が知りたく約半月誰

よりも早く、そしてワクワクして学校に行ったものでした。そのとき私は、その本を書いた小説家より子供に感動を伝える先生になりたいと思ったのです。

会社で働いているときはこの夢を殆ど忘れていましたが、55歳を過ぎたころより第二の人生を考えるようになり、先生になりたかったと言う夢を思い出しました。自分の経験や考えや思いをこれからの若い人に伝えたいと思うようになったのです。その夢を実現する機会が、1997年にやってまいりました。でも、教壇に立って、学生に感動を与えることが出来たのでしょうか、実は、私のほうが感動をもらったと言うところが真実でしょう。

2. 教壇に立つことの怖さ

自らの大学生としての学生生活を終了して以来、35年間も学校と言うものに縁のなかったものが教壇に立つとき、まず学生にうまく教えられるのか、何をどのように教えればよいのかと言う率直な、素朴な疑問が湧きました。当然、自らの学生時代の先生を思い出し、講義を思い出し、そこから講義の構想を練り始めました。つまり、自分の遠い思い出を頼りにしたのです。それは、自らの通った大学の雰囲気とか、学生の勉強姿勢とか、講義を聴講する態度とか35年前の学生像です。実際に私が対面する学生は地方の私立大学の20歳前後の子供たちです。環境も時代も違うことに気づき、どう講義すればこの大学の学生に評価されるのか皆目検討がつかせませんでした。いわんや、感動を与えるなどおこがましいことこの上なしと言うことでした。

そこで、先人である教授の方々に授業を見させてほしいと申し出たり、教務委員長にアドバイスを求めたが、その返事は、“授業は見てもらいたくない”（体の良い断り）、“アドバイスはない”、“あなたは自分の努力で講義をしてくださ

い”と言うものでした。『一国一城』の主であることを自覚しろと言うことです。こうなると大げさにいえば自暴自棄的な創意工夫をもって講義を準備することとなりました。このような先生方の反応は15年前の地方私立大学であっても研究機関であるとの自負、研究者尊重、教育は大学の場合二義的存在であると捉えられていたと言うことです。従って、先生は学校の経営に関心がなく(無頓着)、自分の好きな研究を行い、講義は週に4コマ程度、2日間ぐらいで消化すればよいと考えていたようです。その中に、飛び込んだ教育者になりたいと意気込んでいた私は、従来の先生方からすれば、異邦人であったわけです。

結果的には、学生の人気は私の授業に軍配が上がりますが、しかし、それでよいのかと言う疑問が付いて回りますし、当時は、私が担当した講義と似通った講義を担当する先生もおられ学生によっては、私に対し大学らしくない講義だと言う子もおり、先生の中には、私の講義を聴いたこともないのに風評で批判する人もいて悩み多い出発となりました。

(1997年当時はfaculty developmentと言う言葉がやっと話題となるころであり、学部の教育内容の改善や教員の自己評価や学生による授業評価は初についたころでした。出勤は講義に合わせ、講義がなければ自宅研修の名目で休み、夏休みは2ヶ月間殆ど学校に行かずじまいでしたが、現在では、国立大学でも出勤簿あり、タイムレコーダーが導入され、学校によっては教室内にテレビモニターが設置されreal timeで外部から授業が見れ、聞くことが出来るようになっており、大学内の改革が進んでいます。それは、研究重視から、教育を見直し、考え直してみようという現れです。詳細は別項で触れます)。

3. 教壇に立って

恐怖と戸惑いの中で講義を始めましたが『案ずるより生むが易し』と言うべきか、講義は順調に始まりました。でも、講義終了後何名かの学生より、「ここが分からなかった」、「話し方が早すぎる」、「もっとこのことについては突っ込んで、詳しく話してもらいたかった」と種々の

質問や要望受けましたが、自分の講義をきちんと聞いてくれたのだ、また興味や関心を持ってくれたのだと言う安堵感が沸くと同時に、あの説明では理解できなかったのかと反省しつつ恐怖と戸惑いが容易にぬぐえませんでした。実社会より飛び込み教員を目指す人は、自らの経験や体験をもとに講義を構成するが、大学院で研究者となることを目指し研究成果をもとに講義する先生との違いが当然あります。その違いを挙げてみますと、たとえば、語学の授業です。フランス語を教えたときのことです。この大学では、フランス語は第二外国語です。私の考えでは、第二外国語は将来、何かの機会にその言葉を使わざるを得なくなったとき、簡単な会話が出来るとか、もう少し深く学ぶ必要が出た際に独学できる基礎、基本を身につけておけばよいと考えました。従い、一年次生向けの授業は、文法の基本を繰り返し、繰り返し教え、会話を楽しむことを90分授業の半分、残りはフランス語の成り立ちの歴史やフランスについて話すことに費やしました。ところが、履修生が多いため同時に、別クラスを金沢大学より派遣されたフランス語専門の非常勤講師が担当していました。この先生は、教科書一冊を一年間で教えきりました。(当然、私は反省しクラスの学生でフランス語を熱心に修得したいものに補講を行いました。45名の学生中5名がこれに応じました。このことは、どんな講義でもクラスを3分類できることを示します。即ち、熱心かつ勉強意欲に満ちた学生とやや関心のある学生と無関心派です。私が熱心派の学生の存在を忘れ、その他無関心派の学生に迎合したは授業を行ったことを示すわけで大いに反省をいたしました)。その結果、2年次を迎えた際に、私の授業受講希望者が70名を超えました。その上、新入生のフランス語履修希望者の80%の学生が先輩たちに情報をもらい私のクラスに申し込みました。当然、非常勤講師より、教え方を変えろとか、学生を均等に分けましようとか言われるかと思っていたら、反対に感謝されました。学生数が減って授業がしやすくなったと言うことです。さらに、ひどいことに授業が始まって2週間ほどたったら、2,3名の学生を連れてきて、この学生たちは私の授業について行けないので、私のクラスで面倒を見てくれというのです。この例は、何を意味するのでしょうか、この非常勤講

師は典型的な研究者教員です。学生を“人”と見ず、機械かロボットとみて機械的な講義を行っていたのですが、実は、学校側や学会の教員の評価の基準は教室内での教育の仕方や成果でなく、研究業績の評価が中心ですのでこの欠陥が生まれます。

4. 学部長となって

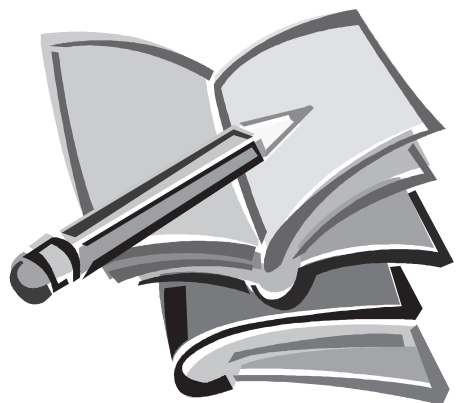
日本の18歳人口が急減し始めた2003年に、法学部と外国語学部の学部長を務め、2004年より新設の未来創造学部学部長となり、3学部の学部長を2年間務めました。日本全国で3つの学部の学部長を同時に務めたのは私だけだと思います。大学人となって5年間しか経っていない私がなぜこのような重責を負うことになったのでしょうか？学部長を引き受ける際、家内などからは猛反対を受け、他大学の学部長経験者からも止めておいたほうがよいと言われ悩みに悩んだ末引き受けましたが、なぜ門外漢的な私にこのようなポストを任せようと大学の経営陣が考えたのかと言うと、前述の研究者、研究優先の大学のあり方や存在理由が問われる時期を迎えたからです。一方で、旧態依然の大学の体質である研究機関であることに拘る先生方の意識改革が求められていることと、他方では少子化による18歳人口の減少で大学生数が減るため大学間の学生獲得競争から来る大学の淘汰の時代を迎え大学の特色を出す時期を迎えていたからです。

学部長の5年間は、研究者であろうとする先生たちの意識改革を求め、理解してもらうための葛藤の日々でした。しかも、性急にことを進

めようとする経営側との話し合い、先生方の主張もある程度汲んでもらうための会合などで、何度も放棄したくなる役でした。(私は若者に感動を与えるために教員になったのだという思いが常にあり、焦りさえ感じました)。ここまで縷々述べましたのは、日本の大学が明治初期に創設して以来100年以上経過し、日本全国に約750の大学があり、旧7帝大のような総合大学や一学部しかない単科大学までが存在するが、その教壇に立つ先生は高校や中学の先生と違って、研究者であるとの自覚の下、自分の専門、研究を一方向的に講義するスタイルが浸透している。そこに、最近テレビでもはやされているハーバード大学の先生方の講義が評判となる理由があります。しかし、2011年の日本は、学生数の減少傾向や社会が求める人材の質も変わりつつあり、大学の数の上での淘汰と質の上での変革が必要となっています。

学部長の席を退いてから反省もこめて、省みると改革は遅々としてではあるが少しは前進したと思えるが前途多難といったところですが、教育立国と小泉前首相が唱えましたが、日本はいまの大学の在り方を見て教育立国でしょうか？

さて、今回のところはこの辺で終わるとして次回に、改革を詳しく述べて読者の皆様が日本の大学教育をどう考えられるか聞きたいと思います。そうした、問題を抱える日本の大学で私が学生に感動を与えられたか、与えられたのかも書かせていただきたいと思います。



50 余年の恍惚と愉悦

岡 田 茂



男百人寄れば
オペキチ二人と
言うのが相場
の様です。私の故
郷は、尾道から
当時は巡航船で
90分程の小島で、
造船と美味しい
魚と蜜柑と除虫

菊と美人の多産地で知られておりました。瀬戸内海の温暖な気候と穏やかで親切な人たちに囲まれ、島の外で暮らすなど考えてもいない少年でした。いきなりこの世界に引きずり込まれたのは高校2年の初夏。帰宅してテレビをつけた処、画面に出てきたのがイタリアオペラのカルメンでした。オペラは見たことはありませんでしたが、その時はこれはオペラだと直ぐに分りました。私の好みにぴったり合ったんでしょう、たちまち引きずり込まれ虜になりました。文化と言ってもせいぜい教科書で絵とか彫刻の白黒写真を見る程度で自分の世界とは関係無いと決めてましたが、カルメンは目・耳・肌から脳に真直ぐに響いて来、熱波が脳を直撃しそして全身を駆け回りました。鳥肌がたちこれが文化なのかと我を忘れる程感激し、よし大人になったらイタリアに行ってオペラに包み込まれた生活をしようと思案しました。翌日担当の先生にこの希望を叶えるにはどうしたら良いかと聞きましたが、先生ぶったまげて「分らん調べるから一寸待て」と言われ3日後に出てきたのは、大学でイタリア語を学びイタリアと接点がある会社を探せと言うものでした。後々その先生から言われたのは、「あの時肝腎なことを言い洩らしたが、あの大学はお前の学力では絶対に無理だ」と言うこと。他の先生からもこの点を強く批判されたがとうとう言い出せなかった。お前がなんであの大学に入れたのか未だよく分らない。

かくして若者は桃源郷の如き島を離れ東京に移り住むことになりました。

初めて生のイタリアオペラを聴いたのは1961年。イタリアから超一流の歌手が纏まって来日し、

上野文化会館で演じられました。貧乏学生、乏しい資金の中選んだのが“アンドレア・シェニエ”と“道化師・カヴァレリアスチカーナ”の二本でした。アンドレア・シェニエは本邦初演だとかで、作曲者ジョルダノーと言う名前は馴染みが無くそして筋書きも全く分かりませんでした。黄金のトランペットと讃えられたテノール (T) のマリオ・デル・モナコとマリア・カラスと並び賞されたソプラノ (S) のレナータ・テバルディーに魅かれ選びました。友人の伝手でゲネプロも見ることが出来ました。1階の舞台正面の特等席に座り目の前で二人の熱気溢れる予行演習も肌で聴くことが出来ました。練習の後出てきたおふたりに覚えてたのイタリア語で挨拶をしたら応えてくれると言う出来事も有りました。歌劇団の初演がこの曲で日本での初公演を初日に聴けた訳です。フランス革命の頃、実在した愛国の詩人シェニエと伯爵令嬢マッダレーナの純真で切ない恋の物語ですが、イタリアオペラの本流と言えるロマンティックなそして気高いメロディーを、黄金のトランペットが強く・澄んだ・生命力のほとばしる声でそして信じられない程の音量で歌い上げ、それにヒロインがしっかりと呼応して歌を作り上げていく。夢の様な3時間でした。もっともっと人気が出てよいオペラだと思いますが、あの音程と音量と声の質は日本人のテノール・ソプラノには無理なのかも知れません。

道化師はモナコの18番、ヒロイン役のトゥッチそしてヒロインの愛人役のアルド・プロッチィ(バリトン、B)と名だたるメンバーで全てに満足しました。

既にオペラブームは始まっており、切符は発売前夜から並びましたが買えるのは一枚のみで、すぐに並び直しよう一枚がぎりぎりを買えました。無論一番安い500円券で5階席でした。フォルテは当然ですがささやく程の音量のピアノシモが5階席の隅々迄そして脳のひだに迄しみ通りに訴えて来るその声の質と技には感服の他ありませんでした。1963年には20世紀最高のメゾソプラノ(MS)と思っているシミオナートとバリトン(B)のバスチアニーニによるヴェルディーの“イル・

トロヴァトーレ (吟遊詩人)” を満喫しました。

皆さんの中にはオペラの愛好者が随分おられることでしょうか、一般的知識として有名作曲家の年代の流れを簡単に触れておきましょう。

モーツァルト 1756－1791、ロッシーニ 1792－1868、ドニゼッティ 1797－1848、ヴェルディー 1813－1901、プッチーニ 1858－1924、リヒャルト・シュトラウス 1864－1949。

曲の筋書き・メロディー・テンポ等々時代により随分変わってきております。

さて私の方、58歳になったのを機に退職し待ちに待った自由闊達な生活に入りました。在職中としてそれ以降に蒐集したLP、CDも700枚程になっておりました。前述のアンドレア・シェニエはモナコ・カラス (1955年ミラノ・スカラ座でのライブ録音)、カレーラス・エヴァマートン、モナコ・テバルディーと3枚有ります。カラスのCDは少々録音に問題がありますが、ライブだけに聴衆の熱狂振りがびんびん伝わってきます。この年カラスは同じスカラ座で椿姫を歌いそれが世紀の絶唱と大喝采を浴びており、このシェニエも録音さえ良ければと残念でなりません。

この7年後カラヤンが当時売り出し中のミレッラ・フレーニを主演に立てカラヤンの解釈による椿姫をやった処大ブーイングを浴びせられ、その為フレーニは長い間“ミミ (プッチーニ作曲ラ・ボエームのヒロイン) の” フレーニと言う枕詞を卒業できなかった由。又スカラ座ではカラヤンの後、約30年間椿姫の公演は出来ず“カラスの呪い”と言われた由です。

CDを中心にオペラは49セット、更にアリア集も沢山有り、カラスに至っては17枚も有ります。同じ曲でも歌手により心への響きが随分違ってくることは皆さんも経験されたことでしょうか。オペラではありませんが、ブラームスの中で一番好きなドイツレクイエム。カラヤン指揮で1948年録音のシュワルツコップ×ハンスホッターと1977年のトモワ・シントウ×ヴァンダムを聴き比べますと、シュワルツコップとシントウの違いが窺えます。具体的には音程の幅の違いで、各音程の領域はドとレの分岐点は音程と音程の真ん中と見るのが妥当でしょうか、私の耳には、シュワルツコップは領域全てではなく端の部分は残してど真ん中に絞っている、一方シントウは領域全部を使って

いるとの差が感じられ、シントウの方が大らかにゆったりと聴ける気がしております。尤も、音程の領域云々は私の勝手な解釈で、その様に感じられる最大の要因はお二人の声の質の違いなのかも知れません。

退職し12年になりますが、毎日の楽しみを中心は何と言ってもオペラ。一昨年9月より毎月2巻のペースで本屋でDVDが手に入る様になり、予定量の60巻の内45巻が届いております。DVDはオペラを楽しむ・理解する上で画期的なものと言えましょう。歌っている歌詞が直ぐに日本語で画面の下に出て参ります。筋書きだけでなく歌の中身迄細かく掴めるのですから、自分が主人公になれる訳でして喜びが3－4倍になるのは自然のことです。肌に合わないと敬遠していたワグナーもすっかりひいきになりました。全て劇場でのライブですので、歌い手の顔・スタイル・しぐさの他観衆の反応とか舞台の創りとかがはっきりと分ります。ハイライトではなく全編を収めているのも嬉しいところです。歌手の全盛期の舞台も多くレヴェルは非常に高いと思います。オペラは一寸ねえと思っておられる方、このDVDをご覧になれば欧州での圧倒的人気に納得されることでしょうか。1巻1990円は手頃な価格と思います。

お勧めは沢山有りますが、私の好みで厳選すれば、椿姫、ノルマ、イル・トロヴァトーレ、魔笛、ラ・ボエーム。他にロッシーニ・モーツァルト・リヒャルトシュトラウスの3人が1つの物語を連作でつづった3部作“セヴィリアの理髪師”(前編)・“フィガロの結婚”(中編)・“ばらの騎士”(後編)、この3曲は3人の作風・特徴がはっきり出ており趣き豊かに楽しめます。3編全てに登場するのはロジーナ (前編のヒロイン)・アルマヴィーヴァ伯爵夫人 (中編、ロジーナの結婚後)・元帥夫人 (後編、伯爵夫人のその後の姿) のみで歌手はバルトリ (MS)・キリテカナワ (S)・フェリシティ・ロット (S) とどれもすごいが私の一押しはロジーナ役はバルトリ、22歳にしてこの大役を可愛く時にはコケティッシュに見事に演じております。フィガロと伯爵は前・中編。ケルビーノ・オクタヴィアンは中・後編の登場で少年・青年役だがケルビーノがS、オクタヴィアンがMSと女性が演じております。オクタヴィアン役のソフィー・オッターは声の質、技量、歌の出来は言うまでも有りませんが、

すらっとした姿と清潔感に溢れた美貌で美少年好みにはたまらないでしょう。活躍期より判断するには、先ずモーツァルトが作曲し、そのあとロッシェリが前編を作り、最後にリヒャルト・シュトラウスが後編を纏めたんでしょうが、モーツァルトの作品の前編をモーツァルトに断わりも無く勝手に作ったロッシェリもすごい根性だなと思いますね。

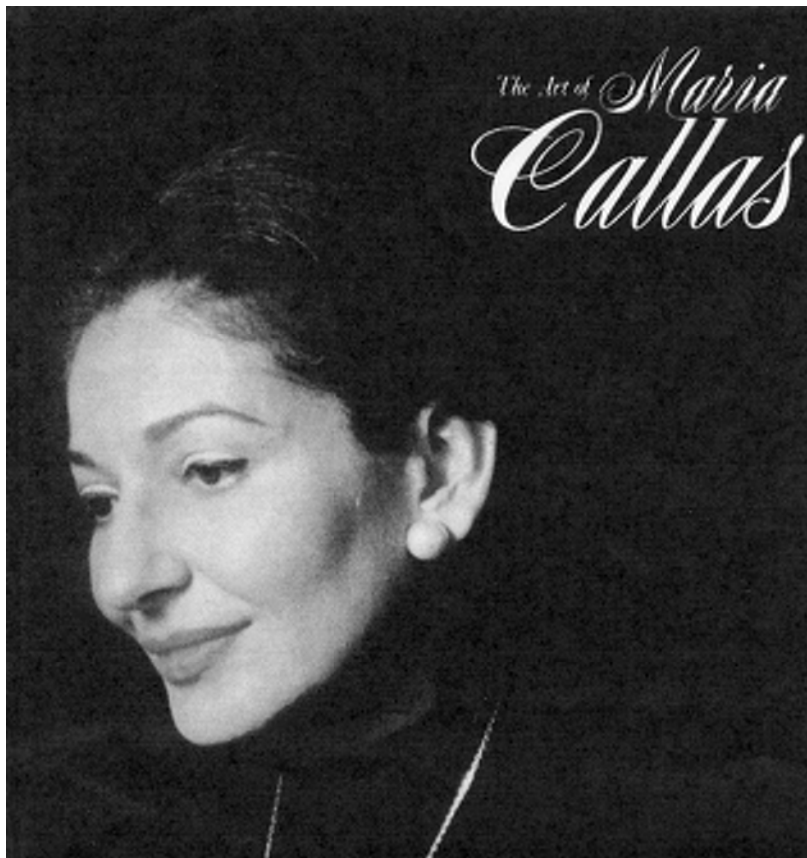
昨年5月にシミオナートが亡くなりました。あと1週間で100歳であった由。現役時代の写真では一寸ばかり意地が悪そうに写っておりますが、実際は日本からの留学生の面倒をすごく丁寧に見てくれ、マンマ・マンマと慕われていたそうです。

彼女の歌う歌劇ミニオンのアリア“君よ知るや南の国”は皆さんのお耳に届けたいものです。殆どの方はどこかで聞いたことがあるなあと感じられることでしょう。

テバルディー、トゥッチー、シミオナート、モナコ、バステアニーニ、プロッティ、高校生の私を興奮の渦に巻き込んでくれた方々は全員河を渡られました。

16歳で知ったこの恍惚感と愉悦感は輝きを減ずることなく歓びで心を満たしてくれております。何ものにも変えがたい私の宝物です。あと15巻のDVD、どの曲を選んでくれるのでしょうか。この2年間入れ込んでいるドニゼッティ、ベッリーニ、リヒャルト・シュトラウスを是非にと希望しております。

ソナタ、室内楽、協奏曲、交響曲、宗教曲と好きな分野は広く有りますが、私にとっての頂点はオペラです。死ぬ迄オペラに埋もれそして陶醉出来る様脳の活性化には努めていかねばと心している処です。



日本の誇るBBB(= Better Bend than Break)

浜 地 道 雄

MEN WANTED for Hazardous Journey. Small wages, bitter cold, long months of complete darkness, constant danger. safe return doubtful. Honour and recognition in case of success. — Ernest Shackleton

この100年前の英国 Sir Ernest Henry Shackleton (1874-1922) による南極探検隊員の募集広告は、「年収アップ」という今時の求人広告とは真反対だ。しかし、これに応じた男どもは5,000人を上回ったという。

今回の東北大地震に立ち向かう人々、そして救済にあたる人々、ことに福島原発事故という未曾有の惨事に立ち向かう勇敢な姿を彷彿させる。TV画面には登場しない、陰の英雄たちをも称えたい。

3月11日、地震発生の時、筆者は東京丸の内の高層ビルの30階で国際ビジネスセミナーに参加していた。その揺れはものすごく、永遠に続くようだった。

それこそ、9・11でのNY-WTC崩壊やThe Tearing Inferno (ビル火災の米パニック映画。1974) のビル崩壊のイメージに直結して、この世の終わりとも思える恐ろしさだった。ということは、東北被災地での現場は如何ばかりか、想像を絶する。

ひとしきり揺れが止まり、吐き気と眩暈に悩まされながら、窓の外を見ると、案に反して、周りのビル群にひとつの被害もない。完成間近のスカイタワーも聳えている。

そこで、皆で話した。まさに「BBB」だ、と。Better Bend than Break。柳に風。「壊れるよりも揺らす」という日本の誇る建築構造技法だ。なるほど、日本のビジネス・スタイルもまさに「対決よりは、時には妥協もして契約・解決もっていく」ということだ、と説明。皆の賛同を得た。

その後、世界から寄せられる日本(人)の冷静な行動に対する賞賛はまさにこの辺りにある。

東北地震現場での被害においても、ビル・建物崩壊というよりも、事後の津波によるものであったと後に知った。それにしてもこの地震・津波に続く、福島原発事故においては色々のことを考えさせられる。なかんずく、「間違った情報」の伝わり方、伝え方の危険性、社会的インパクト。その最たるものは「核爆発」「被爆(被曝でなく)」「放射能」「チェルノブイリ」であり、加えて「牛乳・ほうれん草」騒ぎまで登場した。一連の騒動は風評被害に直結するゆえ恐ろしい。それは間違いなくマスメディア、ことに映像による影響だし、ことの成り行きを観察していると、海外(アメリカ)の過剰報道を日本が「輸入」して拡大してるケースも多い。ことに原発事故ということで、これはまさに、チャイナ・シンドローム(The China Syndrome)の世界。原子力発電所事故で、地球を突き抜けて中国まで溶けていくのではないかという恐怖映画だ。1979年、その公開二週間後にスリーマイル原発事故が起きたゆえ、その「風評被害」はいかばかりだったか。

しかし、そんな折に思い出すのはA. Hemingwayのことば。Courage is grace under pressure.

人生波もあれば風もある。仕事がうまく行かない時でも、家族や仲間にしよげた顔を見せられない。危機の時ほど胸を張って平静心を保つ。それが勇気だ。因みに、シャクルトン卿のひきいた南極探検船はEndurance 忍耐という。

さて、これからの日本再建は、公民権運動でのテーマだったWe shall overcome, someday! 但し、somedayではなくsoonだ。

(社)日本在外企業協会「グローバル経営」より転載・加筆

書評

『孤 舟』 渡辺 淳一 著 (集英社)

澁 谷 義

本書の主人公・威一郎は、大手広告会社の常務執行役員を60歳定年で退職した。大阪の子会社社長に転職の話はあったが、蹴ってしまった。毎日の忙しかった仕事は忘れ、退職後は囲碁、フランス語の勉強、読書、観劇、旅行など、自由にのんびりやりたいと期待をふくらましていた。いままで一緒に出かけることもなかった妻との旅も、妻に歓迎されると期待していた。自由で純粋な新しい恋もしてみたいと思った。何も考えず一日のんびり過ごせたら、どれだけ幸せかと夢見ていた。

だが、いざ暇になってみると、その暇が悪夢のようにのしかかってきた。図書館に行って、高齢者の生き方や健康に関する本を読んでみた。ふと、横を見ると、本を開いたまま居眠りをしていた同じ高齢の男性がいた。瞬間、「孤舟」という言葉を思い出した。

定年男性が陥る孤独をリアルに描いているが、著者の得意な中高年のどろどろした恋愛描写が、本書では全くないのが意外であった。中高年男性に売れているというが、定年後の孤独の不安への共感かも知れない。辞典には「孤舟は、ただ一隻浮かんでいる舟」の意味しかないが、著者らしい巧みな新解釈の表題である。

主人公の家庭には、妻の洋子と息子・娘が同居していたが、父の定年後、息子と娘（2人とも未婚）は家を離れ別居した。

妻は家事はしっかりこなしているが、犬の散歩、ヨガ、水彩画、芝居見物などで外出が多い。定年になって一日中家にいる夫を、妻は疎ましく思った。妻とは部屋も別々で、もはや夫婦関係もないが、妻との諍いも多くなった。ある日妻は家出し、娘の処に行ってしまった。家計は妻が握っているが、小遣は与えられ、妻の家出で百万円の通帳を夫は受け取った。

威一郎はデートクラブに電話して、若い女性を

紹介された。アバンチュールに胸がワクワクするが、高級ホテルの会食だけと、家に呼んできてでも会話するだけで、これ以上の進展はない。これまでの淳一氏の恋愛小説とは異なる純愛路線である。でも、妻が一時帰宅したら、女性を家に呼んだことを勘ぐられ、なじられてしまった。女性の感覚は鋭い！！

やがて、妻は家に戻ってきた。娘から夫への仕打ちを逆に非難されて、娘と妻は喧嘩してしまったからだ。夫はほっとした。

知り合った若い女性は、若い男性との結婚を威一郎に伝えてきた。でも、「君のお蔭で元気になった」と威一郎は女性にお礼を言った。

定年男性の孤独を描いており、実感させられる点もあるが、著者はサラリーマン生活の経験はほとんどないためか、定年後の男性への理解は不十分であると思った。定年後の男性の孤独感を一途に描き、話題性を呼んだと思う。

定年後の生き方は人さまざまであろうが、それ程費用をかけずに、様々な趣味に生き甲斐を見出すこともできる。濡れ落ち葉にならなくてすむ。心がけ次第であると思う。夫婦別々の趣味や生き方が多いと思うが、夫婦仲良く定年後の人生を謳歌しているカップルもあろう。心身ともに健康でありたいが、高齢化に伴い体調が難儀になるのが辛い。



書評

『超訳 論語』 岬 龍一郎 著(PHP文庫)

*自分を磨く 200の言葉 人生最高の教科書!

澁 谷 義

「日本人の傍らには いつの時代にも、この本があった。多くの偉人たちから愛され、日本人の道徳観の柱とも言える論語。…不朽の名著が、かつてないやさしさと甦る」と帯封に解説されている。

前回 藤原・宮城谷氏の対談「英語より論語を」(文藝春秋新年号)を紹介したが、Kさんより「両氏の主張、特に日本語を徹底的に学べは大賛成。でも論語の素読はアナクロ、大人にとってもチンプンカンプン・・・」とのメールをもらった。「私も論語は、ろくに読んでいませんね」と返事したが、待てよ、論語の教えは日頃馴染んでいることも、かなりあるかなと思い直した。首題の本を購読して、改めてそうかと思った。

論語は約2500年前の中国で誕生した孔子とその弟子たちによる「言行録」である。孔子の弟子たちが、紀元前1世紀頃整理統合して、今日の「論語」20篇になったという。日本へは5世紀前後応神天皇の頃、百済の王仁(わに)が献上したと日本書紀に伝えられている。江戸時代に儒学を大成した朱子学を幕府が官学としたことから武士の必読書になった。今日、道徳の原点である論語が見直されている。

本書の200項目から印象に残ったいくつかを、紹介してみたい。

- 007) 温・良・恭・儉・讓を兼ねた人物。これが孔子の徳である。
- 011) ぶれない中心軸。為政者が自分の徳を修めて政治を行えば自然と天下は治まる。我が国の政治家に求められるや切!!
- 014) 天命を生かす。志学、而立(じりつ)、不惑、知命、耳順、従心という言葉は習った覚えがある。15、30、40、50、60、70歳の人格形成である。
- 017) 温故知新。故(ふる)きを温(たず)ねて新しきを知ることで馴染みがある。

- 033) どんなときでも仁を忘れない。
- 035) 太ったブタになるな。痩せたソクテラスをめさせ。
- 037) 義に従い道を選べ。
- 041) 私(孔子)の生涯の道は忠恕(ちゅうじょ)のみ。即ちまごごろと思いやり。
- 045) 言行不一致は恥と知れ。
- 119) 過ぎたるは及ばざる。やりすぎは、控えめにすぎると大差ない。
- 126) 悩んでもどうしようもないことは悩まない。
- 137) 飽きずに続ける。そう言えば「天才とは99%の発汗であり、残りの1パーセントが靈感である」とのエジソンの言葉もある。
- 146) 剛毅木訥(ごうきぼくとつ)の人。意志が強く、飾りっ気がなくて口数の少ない人は徳の本質である。仁に近い。
- 169) 自分に厳しく、人にやさしく。
- 181) 文章の目的は、相手に分からせることで、美辞麗句を並べることではない。文を書くにあたり、心がけようと思う。
- 192) 女子と小人(しょうじん、心のできていない人)は養い難し。現代ではこんなことを言ったら女性蔑視・セクハラになる。孔子さまに異論を申しあげたい唯一の項目!!



パクス・ローマとパクス・ジャポニカ

竹 内 可 能



今年お正月を迎えて三が日のことだったと思うが、読売新聞「地球を読む」というコラムに、宗教思想家の山折哲雄先生による「パクス・ジャ

ポニカの奇跡」と題する寄稿文が載っていたのを、大変興味深く読ませていただいた。パクス・ジャポニカという普段耳慣れない言葉が新鮮に思えたからだった。

氏が言わんとするところは、これまでわれわれ日本人はややもするとローマ時代の「パクス・ローマ」(ローマの平和)にばかり目をうばわれがちだが、自国の歴史に目をやれば、史上二つの時代の「パクス・ジャポニカ」(日本の平和)を実現させたことに、もっと注目してしかるべきではないかと。つまり平安時代の350年と江戸時代の250年のことについてである。

そして氏がお考えになるのは、このような二つもの「パクス・ジャポニカ」がわが国で実現したのは、世界史上にも奇跡的な事実と見てよく、それをなしえたのは、ひとえに夫々の時代に国家と宗教が調和の関係を結ぶことができたことに起因するとされる。つまり逆にいえば、そうした調和をなしえなかった時代が、わが国の戦国時代であり、先の大戦で歴史的な敗北を招来した昭和時代ではなかったかと。

こうして氏が引き出された結論は、「パクス・ジャポニカ」を実現させた国家と宗教の調和の関係とは、具体的には日本人の精神基盤たる「神仏共存」と「象徴天皇制」であること、そして今こそわれわれは世界に向けてこのことを発信すべき時ではないかと主張されていた。

日ごろ自ら“素人歴史探偵”などと名乗り出て、著名な先生方のご高説などに容喙するクセからぬけきらない私が、またしても山折先生の一文にくぎづけとなってしまったのは、氏のいわれる「神

仏共存」論の世界向け発信についての私なりの懐疑であった。

しかし本当のところを申し上げれば、この正月を迎えてから私が夢中になって読み始めていたのが、野上弥生子さんの訳になるブルフィンチの「ギリシャ・ローマ神話」であり、これがまたわがお気に入りの塩野七生氏の「ローマ人の物語」と二重写しのようにして、面白いったらないのであった。たまたまそんな興奮状態にあった私奴、素人歴史探偵が、山折先生のいわれる日本の「神仏」に触発されて、たちどころにギリシャ・ローマ時代の神々を思い起こしたという次第であったのだ。

前置きがながくなって恐縮だが、柄にもなく私がギリシャ・ローマ時代の神々に興味をおぼえるようになったのは、先に述べた「ローマ人の物語」の中で、著者の塩野七生氏が書きとめている皇帝ユリアヌスについての感懐であった。

それは今から5～6年前頃のことかと思うが、辻邦生の大作「背教者ユリアヌス」を読んだときの感動で増幅されたのか、それ以来私の心に埋み火のように消えることのなかったものだった。

私とその背教者ユリアヌス帝に大変な興味を覚えたのは、彼はローマ時代の衰退期にあって(4世紀半ば)、文字通り後世にいたるまで背教者呼ばわりされながら、イエスを「たかがガリラヤくんだりをほっつき回るいかがわしい予見者まがいの男」などときめつけ、キリスト教を軽蔑し弾圧しつづけた皇帝だったが、その彼が一方ではギリシャの哲学者プラトンをこよなく愛し、また五賢帝の一人である哲人マルクス・アウレリウスを誰よりも尊敬し、何よりも彼が夢見たのは、崩壊寸前であったギリシャ・ローマの神々の復活であった。私が感銘をうけたのはそのところであった。

しかし皇帝ユリアヌスも即位後たった19ヶ月にして、戦陣のチグリス河畔にペルシャ軍の奇襲を受けて命を落とす。その後彼の後継者たちが競うようにしてキリスト教の国教化にむけてひた走り、やがてローマが滅亡(476年)を迎えるのは

歴史の語るどころであった。こうして栄華を誇ったギリシャ・ローマの神々も、歴大な物語と数々の廃墟を跡にして歴史の表舞台から降りる。ローマの滅亡がギリシャ・ローマの神々の崩壊とほぼ期を一にしている姿に、私は感慨を禁じがたいのである。

その「背教者ユリアヌス」（彼は幼少期に洗礼を受けているため、後世にいたるまで背教者呼ばわりされることとなる）についての辛らつな感懐を塩野七生氏はこんな風に「ローマ人の物語」の中で書きとめている。すなわち、もしもユリアヌス帝が帝位たったのが19ヶ月というのではなく、19年間であったとするならば（帝の夭折から思うに充分ありえたのだ）、その後のローマ帝国はどうなっていたらどうかと。つまり作家はいう、「もしもそうであったとすれば、キリスト教徒であることが、現世でも利益になるとはローマ人も考えなくなったかもしれない。そして宗教は、現世の利益とは無関係の、個々人の魂を救済するためにのみ存在するものにもどっていたのではないだろうか」と。

ユリアヌス帝こそは、宗教が一神教であることの危険を知っていた最後のローマ皇帝だったと彼女は考える。

さて山折先生がいわゆる「パクス・ジャポニカ」を支えた日本人の精神基盤としてあげられる二つの思想のうち、私は今「象徴天皇制」についてはこれを他日にゆずるとして、本稿では「神仏共存」について考えて見たいと思う。そのためには丁度よい機会でもあるので、それならば「パクス・ローマナ」を支えたはずのローマ帝国時代の精神基盤と云ったら、それは一体何であったのかについて考えておきたいと思う。彼我にもたらされたそれぞれの過去の平和は、時代も国柄もまったく異なりはするが、それを現出させた精神基盤にはいずれの側にもまちががなく宗教がからむところであるからだ。

さて、「パクス・ローマナ」を支えた精神基盤は何かといえば、それは一言でいって“古代ギリシャ・ローマの神話の世界”ではなかったか、と私は思う。

そうであるならば、浅学菲才な素人探偵子の出番でないことは承知の上で、挑戦させてもらいたいのだが、ここにあらためてギリシャ・ローマ時

代の神話の世界を特徴付けて見たら、どんなことになるのだろうか、私なりに以下に考えてみることにしたのである。

第一に、これはもう言わずもがなのことではあるが、最高神ゼウス（ユピテル）を中心とする多神教であることだ。その神々の総数と云ったら俗に30万とも言われるのは、おそらくこの時代に栄えた一都市国家の人口ぐらゐは想起されていたのかもしれない。私はこれを“汎人神的多神教”と呼んでも差し支えないように思うのである。本居宣長による「古事記」の世界の神々にさえ似て、人間すべからず死しては神となる世界のことである。

第二には、ギリシャ・ローマ時代に栄えた地上の都市国家よろしく、最高神ゼウスのもとに配置されているよろずの神々は、すぐれて職掌的（分業的）で機能的であることに驚かされる。最高神ゼウスが“神々と人間の王”とされるのは、まさに私がいう前述の“汎人神的な神”の代表として理解されるが、その王が天空を支配するとともに、政治と法律そして道徳という最高の権力と徳目を掌握するとされるのは、いかにも地上の支配者“皇帝”を彷彿させてくれる。哲人皇帝マルクス・アウレリウスや背教者ユリアヌスが目指した皇帝の姿は、まさにそこにあつたのであろう。

諸神が宇宙に配置される仕方も歴然として機能的である。天空に最高神ゼウス（ユピテル）、太陽神にアポロン（アポロ）、月の女神にアルテミス（ダイアナ）、海や大陸にポセイドン、そしてこれら宇宙を支えるアトラスといった具合だ。

レクト、ティシポネ、メガイラ、であった。

職掌柄でいえば、古代国家に死活の戦争を担当する神ならアレス（マルス）、海洋通商で栄える都市国家に肝心の商業の神ならヘルメス（メルクリウス）、或いは農業の神ならケレス（デメテル）、それにさしずめ現代の文部科学大臣に相当するのが、学問・技芸を掌る女神アテナ（ミネルバ）といった具合である。

第三に、これがギリシャ・ローマの神々の特徴の極め付きではないかと私が思うのは、人間の言葉として編み出された形而上の概念そのものまでが、神の司る領域とされていることである。概念の神格化とでもいう世界のことでないかと思う。

たとえば有名な神アフロデティ（ヴィーナス）が司るのは“愛や美”であった。それに加えるに、もし対象が“恋”だとすれば神はエロス（クピド）といった具合となるのだ。

さらにいえば、日本人の間でも比較的人口に膾炙しているディオニュソス（バッカス）は、酒の神にはちがいないが、この神が司る概念の領域は“陶醉”であり、一般的には“パトス”の世界の神であるとされる。哲学者ニーチェがこのパトスの神ディオニュソスに、好んで対峙させている太陽神アポロン（アポロ）は、概念ならエートスの神であり光明の神であったことはいままでもない。

枚挙にいとまなしとはいいながら、人間の定めなき“運命”ならこれを3人の女神が司ることを付け加えておきたい。これらは私にはあまり馴染みない名前だが、クロト、ラケシス、アトロポス。ついでに恐るべき“復讐”もあげ連ねておこう。この概念もやはり女神3人の管掌である。名前はア

さてここに概念の世界の神々のこれまた極め付きと思える典型例を、ムーサイ（ミューズ）と総称されるゼウス神の娘9人からなる女神たちによって検証しておこうと思う。

つまりはこの女神たち9人には、それぞれに文学や音楽或いは科学といった知的分野の、より細分化した分担が見られるのである。多少の煩雑をおそれずムーサイの神々の分野を下記したものである。（左に女神名、右に担当分野）

カリオペ	叙 事 詩
エウテルペ	抒 情 詩
メルポネペ	悲 劇
タレイア	喜 劇
エラト	恋 愛 詩
クレイオ	歴 史
ウラニア	天 文 学
テルプシコレ	合 唱 舞 踊
ポリフィムニア	聖 歌

こうして最高神ゼウスの娘たち9人の女神が分担するミューズの世界を見渡すとき、私はそこにこそギリシャ・ローマ文明の“華”を見、「パクス・ロマーナ」を知る思いをいたす者である。

卑近な話にわたるが、筆者が現役時代に所属の部門が買収したフランスの農薬の製造・販売会社[カリオペ]は、正に上記の叙事詩を担当した女神そのものの名前であった。農薬といえどもこれを

散布する田園は、今も昔も女神が司る叙事詩の対象と思われる。

私は先に「パクス・ロマーナ」を支えたローマ人の精神基盤が、古代ギリシャ・ローマ時代における神話の世界にあるとした。ここまで私が一とおり目を通してきたつむりのギリシャ・ローマにおける神々の特質が、彼らの精神基盤の全てを解き明かしたとは思はないが、“概念の神格化”にまで止揚した神話の世界一つ取ってみても、それだけでもう結構な「ローマの平和」の説明にはなるうかと思うのである。

将軍カエサルがガリヤ攻略などで見せた被征服民に対する「寛容」はつとに有名な話だが、はじめてこのことを知ったとき、私は正直なところ、こんな高貴な政治的精神が、なぜ遠い古代ローマの時代に発揮できたのか不思議に思ったものだ。しかし今にして思えば、そこにこそ汎人神的・多神教的な神話の世界があったはずで、おそらくはカエサルの脳裡になら、概念としても「寛容」は神の司るところであったのではなかろうか。そんな思いすら強くおぼえるのである。

こんな風につらつら思いをめぐらしていると、あらためて、かくまで見事だったギリシャ・ローマの神々が、なぜあゝまで跡形もなく（遺跡は残ったが）、そしてあゝまで易々とキリスト教に敗れ去ったのかという疑問が、ここは同時に、もしもユリアヌス帝がもう“19年間”も皇位にあったとしたなら、あのギリシャ・ローマの神々も生きながらえることができたのではないか、とする塩野七生氏の仮説とともに今甦るのである。

とまれ、そのことは私奴・素人探偵子の大いなる興味の対象であるが、本誌が規定する投稿紙数は今回この辺をもって尽きようとしている。次号で「パクス・ジャポニカ」の精神基盤とともに本論に入るとして、ひとまず筆を擱くこととしたい。

（次号につづく）

「優しいエジプト人」

坂 田 泰 文

本年2月、ムバラク大統領が退陣しました。1981年のサダト暗殺から、実に30年間権力を掌握してきたこととなります。この間、副大統領も置かず、絶対的な権力を恣にして、溜め込んだ隠し財産は700億ドルにも及ぶといわれます。しかし、それは貧しいエジプト人から収奪した金であり、彼らの恨みの大きさとも言えます。エジプト人は本来、温和で優しい人達です。言葉を代えて言えば権力には従順な民族です。そのような彼らがムバラクを退陣に追い込む行動に出たのは、貧困が深刻化し、困窮する毎日の生活に耐え切れなくなったということでしょう。TV報道をみると、暴動で政権が覆ったのではという印象を受けましたが、エジプト人の一面しか伝えていないと思います。私は1992年から5年間、2002年から2年間エジプトに駐在しました。当時を思い出し、私が抱いたエジプト人像を拾ってみたいと思います。

エジプトは貧しい国です。多くの貧しい人が一部の金持ちを支えるという構図です。国の社会保障制度も日本に比べると殆どないに等しい状況ですが、誰からの支援も得られず孤独死に至るといふ事件は聞いたことがありません。それは、濃厚な人間関係とイスラム教の五行に定められたザカート（喜捨）があるからでしょう。私が知り得たエジプト人も収入の3-5%をモスクに納めていました。彼らが納めるザカートで、モスクは貧しい人に対して医、食、教育を提供します。国が面倒みきれない社会保障をモスクが実践していることとなります。宗教が国家体制や政治制度の隙間を埋めているのです。

「アラブのIBM」をご存知でしょうか。三つの言葉を知っていればアラブで生活できるというのですが、エジプトでも当て嵌まる言葉でした。

インシャラー（「神のご加護があれば」という意味で、約束、あるいは、将来のことを話すときに使われます。言葉通りに取れば、「神のご加護があれば、約束通りになります」又は「約束通りにならなくとも、神の意思です」となり、我々にとっては居心地の悪い言葉でした。）、

ボクラ（本来の「明日」という意味で使われることよりも、その場しのぎに使われる場合が多く、

ビジネスでよく泣かされました。）、

マレーシュ（相手に迷惑をかけた時の「ごめんなさい」という意味と、相手が自分に対して何かミスした場合に「気にしなくてもいいですよ」といった意味があります。）、

IBMに代表される習慣の違いで、エジプト人には仕事面では随分苦労させられましたが、心温まることも多く経験しました。

- ① 当時、カイロ市内でも昼間道端で食事をしている人をよく見かけました。彼らの食事は、アエーシというナンに似たパンをタヒーナと呼ぶソースにつけ、ニンジン、キュウリ、トマト、青野菜の細切れをサイドメニューとする簡単な食事ですが、通りがかりの私にも、「お前も食べるか」と声をかけてくれました。食事をできる喜びを見ず知らずの他人である私にも分けて上げようというのです。
- ② カイロに着くと、空港から市街に向かう大通りがあり、その真ん中は公園になっていました。私が最初に赴任した1992年頃、この公園にドイツ人の女性と二人の子供が住み着いていました。事情を聞くと、エジプト人と結婚して子供までもうけたにも拘わらず、夫が突然エジプトに帰ってしまい音信不通となったそうです。彼女は夫を追って、ドイツからカイロまで来たが彼が見付かりませんでした。在カイロ独大使館の協力も得られず、困った挙句、空港から近いところで野宿しておれば、噂となって夫が迎えに来てくれるだろうと考え、子供二人と野宿したそうです。事情を知った付近のエジプト人は彼女を哀れんで、毛布、食糧、薬を何年も与え続けました。夫は薄情でしたが、彼女の周りには優しいエジプト人が大勢いて助けてくれたのです。二回目の赴任でカイロを訪れた時には、もう彼女たちの姿を見かけることはなく、消息も分かりませんでした。彼女たちが首尾よく夫と再会できたことを祈らずにはられませんでした。
- ③ エジプト人に、「お元気ですか」と挨拶すると、「あなたはどうか」と問い返されることがあ

ります。私が「元気です。」と答えると、「あなたが元気なら、私も元気です。」と挨拶を返してくる。日本人なら、「お元気ですか」と聞かれたら、自分の体調の良し悪しを言うのが一般的ですが、エジプト人は挨拶のときから相手を慮った考えをします。

街中で道を聞くときにも似たような経験をしました。エジプトの街で道を聞くと、恐らく誰もが気持ちよく丁寧に道順を教えてください。しかし、教えてもらった道を100Mも行くと、再び道を尋ねなければなりません。教えられた道は間違っている可能性があるからです。道を聞かれると、エジプト人は何故平気で嘘を教えるのでしょうか。ある人は、エジプト人のいい加減な性格の現れだと言います。あるいは、エジプト人は誇りが高く、知らないと言えないのだと。私は思うのです。エジプト人は、困っている人を失望させたくないため、知らない道でも知っているように教えるのであって、相手のことを慮る気持ちの現れではないだろうか。知らない道を悪意で教えているとは思えないのです。

- ④ エジプトでは親の権威は強く、子供は毎週末になると親の家に集まり、親や家族の健康を確認し、喜びあいます。孫たちも大勢集まり、賑やかな場となります。そんな場に招待されると、家中が人でひしめき合っている情景に出くわすことになり、冠婚葬祭かと思うほどです。エジプト社会は長老を筆頭にした大家族主義で、一族郎党が長老の下に定期的集まり、お互いのつながりを確認しあい、助け合います。血のつながりを重要視するため、血のつながりのない

人間を自分の家族のメンバーにすることには慎重です。勢い、近親結婚が多くなるとも言われます。血のつながった親戚縁者との付き合いは大変です。

エジプト人女性と結婚した日本人男性から、こんな話を聞きました。彼は、イスラム教に改宗してエジプト人女性と結婚しました。ところが、妻の親戚縁者の多くが扶養家族のようになり、妻は金やモノを無心されるようになりました。事業がうまく行かなくなった時でも、親戚縁者はお構いなしに無心に来るので、妻は持っていたアクセサリーを渡し、気がつく、彼が妻にプレゼントしたアクセサリーの大半がなくなっていたそうです。妻に何故そんなことしなければいけないのかと尋ねると、村八分にあうから、持っているものがあれば渡さざるを得ないと答えたそうです。身近に困っている人がいれば、持っている富は分け与えなければいけない。富を持っていて、分け与えないと、彼らの仲間として認めてもらえず、彼らの中で生活していけないのです。

このような濃厚な人間関係も、中に入ってしまえば居心地のいいものなのかも知れません。お互い助け合い、必要とし、必要とされる社会では、孤独死は考え難い現象です。今、思い出しても、濃厚な人間関係とイスラム教という切り口から見えるエジプト人の姿が懐かしく、好ましく思えます。カイロに在住して始めて経験した数々のカルチャーショックは、今でも心を温めてくれます。



ニチメンカイロ支店のスタッフ達と 1993年

故松村昭太郎君を悼む

平 岡 昭 三



小笠原・父島にて

左：平岡昭三・右：故松村昭太郎君

2011年2月4日、松村昭太郎君が一年余りの壮烈なる闘病生活の後、永眠されました。享年80歳、死因は肝臓癌でした。思えば君は私より2歳年下で、同じ12月の生まれでした。二人の交遊は定年後、中央線四方津駅近くのサンメンバーズのゴルフ友達として始まりました。もっとも、現役時代私が社長室の頃、君がアフリカの第一線商社マンとして度々テレビに映り、その後帰国していた時私から「ご苦労さん！頑張っているね！」と挨拶する関係でありました。

私は定年後、長年願望の油絵全国旅行を目論んでおり、そのパートナーを探していた処、君が同行して絵を始めたいとの事で、渡りに舟となりました。私はワゴン車で寝泊りし、日本全国を油絵を描き乍ら、観光やゴルフ等もやりたいという欲張りな計画を立てておりました。そこで二人でうまく寝泊り出来るかテストの意味で、近くの油壺に一泊でヨットを描きに行きました。ワゴン車の後部座席をフルフラットにし、頭を互い違いにし寝袋で寝れば、うまく行く事を発見しました。それ以来最近まで、我乍ら呆れるばかり、日本全国はおろかフランスやオーストラリアまで、何と20年近く二人一身体で、喧嘩もせず旅から旅の旅鳥を続けて来たのであります。

省みれば、油壺に始まり、北海道、東北、近畿、中国、四国、九州、沖縄、小笠原、更に飛躍してフランス一周、オーストラリアのゴールドコースト2回等、夫々ヶ月近くの長旅を続けて来たのであります。この間、今思い出しても懐かしい、二人にしか解らぬエピソードが山程ありました。昨年も落合って、昔話に花を咲かした処でありました。口さがないニチメンOBの人達の間では「松

村は、あのうるさ型の横着者で有名な平岡みたいな奴と、よくまあ長年一緒にうまくやれているものよ。」と言われていた由で、誠に汗顔の至りであります。まあ剛の平岡、柔の松村のコンビでうまく行ったのでありましょう。この二人の友情は、ニチメン広しと雖も、他に類を見ないものかも知れません。

君はまた、生来の人好きで、人を信頼させ誰とでも親しくなる特異な才能の持ち主でありました。そのため何処へ行ってもすぐ友情の輪が拡がり、楽しい事が次々に起るのでありました。マルセーユからボルドー行きのTGV特急列車の中では、フランスの可愛い女子中学生の一団と仲良くなり、遂ちその輪の中心に居りました。又、そもそもフランス行きになった原因は、君のアフリカ時代の友人からの招きでありました。その結果、南仏ニースでの豪邸訪問や一流ホテル一週間車つきの招待を受けました。この事は、この友人が如何に君の人間的魅力に惚れ込んでいたかと云う事の証左でありましょう。お陰で二人はニース、カンヌ、モナコ、モンテカルロ、サントロペ等コートダジュールの各都市で、油絵を描いたり、ビーチの散策や水泳等、紺碧海岸をフルにエンジョイ出来ました。

私は君のお陰で、誠に有意義な定年後の後半生を過ごす事が出来ました。私は葬儀の当日、人目も憚らず君のご遺体に縋り「何故先に逝ったのか！」と号泣するばかりでありました。

最近では私も老い先の短さを痛感しておりますが、昔流行った「戦友」の歌がしきりに口をついて出て来て仕方ありません。

“こゝはお国を何百里、離れて遠き満洲の、赤い夕陽に照らされて、友は野末の石の下。思えば悲し昨日まで、真先駆けて突進し、敵を散々懲らしたる、勇士はこゝに眠れるか。

思いもよらず我一人、不思議に命永らえて、赤い夕陽の満洲に、友の塚穴掘ろうとは。”

拙い私を、只管助けてくれた昭太郎の、あの温顔を胸の奥深く偲びつつ、尽きせぬお礼を申し上げ、又親しくして頂いた奥様にも、深甚なるお悔やみを奉り、心からの冥福をお祈りするばかりであります。合掌

【編集後記】

今年も、世の中の出来事に関係なく、自然は桜の開花を終え、青葉茂れる候となった。未だに止むことのない3・11東日本大震災と原発事故への対応の迷走振りに会報の編纂どころではない雰囲気だった。

ニューズウィークは、この大惨事を表紙に“APOCALYPSE”と大書して特集した。大惨事が破局でないことを祈る。

そして今も続く、新聞・テレビの報道に梅雨空のような陰鬱な気分だが被災者のことを思えば我々は節電その他不便は我慢する。

大震災による東北地区の社友会会員の被害状況を役員・世話人が直ぐに調査したが直接的被害は無いことが分かり安堵。

今回の会報には、大震災および原発事故に関わる寄稿文が二つ相揃った。丸山修作前会長はじめ多くの方々の秀逸なエッセイ、卓見を頂き、会報が益々充実してきたと言える。

会報前号で、“人のまさに死なんとするやその言やよし”と述べられた松村昭太郎さんの寄稿文が、まさに絶筆となってしまった。

ニチメンOB仲間はもとより御学友、鎌倉七里ヶ浜の町内会の皆様の敬愛を一身に集めておられた松村さんは爽やかに白鳥の如く旅立たれた。

ある高名な作家が『私が男を評価する基準は、ただ一つ、潔いかどうかだけだ』と書いている。松村さんは、そのような男でした。ご冥福を祈って。

(長谷川 洋)

ニチメン東京社友会

〒107-8655 東京都港区赤坂2-14-27
 双日(株)内 東館17F

発行人	；倉又 則夫	代表世話人
編集責任者	；長谷川 洋	世話人
アドバイザー・スタッフ	；高木 亨一	世話人
	倉持 次雄	世話人
印刷所	；(有) 関内	印刷